大東文化大学経済論集　110－1、2018.09

1860年代前半のマルクスの地代論研究
――61-63年草稿、『資本論』第三部主要原稿第6章（65年）および関連抜粋ノート（リービッヒの農業化学）を中心に――（1）

竹　永　　進

内容目次

1. はじめに――前史から
a. ジェームズ・アンダーソンとの出会い―1845 年の「マンチェスターノート」
b. プルードン批判とリカードの地代理論―『哲学の貧困』（1847 年）
c. 1850 年代初頭の「ロンドン・経済学ノート」における地代・農業（化学）研究
―リービッヒ、ジョンストンとの出会い
d. 1850 年代初頭のマルクスの地代論―エンゲルス宛の手紙
e. ロートベルトゥス
f.「経済学批判」の体系プランにおける土地所有（地代）の理論

2.1861-63 年草稿におけるマルクスの地代（論）研究―絶対地代と差額地代―
a.「5 剰余価値に関する諸学説」へのロートベルトゥスの地代論の「闖入」
b. 資本主義における工業と農業、剰余価値と利潤
c. 価値と生産価格、農業
d. 農業における資本の構成、ロートベルトゥスの「新しい地代理論」

（以上本号　以下続く）

e. 絶対地代と差額地代
f. アンダーソン、マルサス、リカード
g. アンダーソンとマルクスの差額地代論
h. 地代論の位置、「例証」から「転化」へ

3. マルクスの地代論の構造とリービッヒの農業化学
―『資本論』第三部「主要原稿」第６章―
a.「主要原稿」第 6 章の執筆
b. 1865 年のマルクスの抜粋ノート
c. リービッヒからの抜粋、新しい農業化学
d.「主要原稿」第 6 章の地代理論
i)「a. 緒論」　　ii)「c. 絶対地代」
iii)「b. 差額地代」、差額地代 I　　iv)「b. 差額地代」、差額地代 II

4. むすびにかえて――『資本論』第一部刊行後の地代論研究

1. はじめに――前史から

筆者は、表題の上でもテーマにおいても本稿と大きく重なる論考をすでに8年前に発表している（竹永 2010）。2017年9月はマルクスの『資本論』第一部初版刊行から150年目にあたりこれを記念する国際コンファレンスがリヨンで開催され、そのメガ関連セッションで研究報告をすることになり、新メガとマルクスの地代論研究というテーマが割り当てられた。これを機会に、数年前に一度行った同じテーマの研究を振り返りその後の状況の進展（特に新メガ諸巻の継続的刊行とこれに関連した諸研究[(1)]）を考慮にいれつつ、同一のテーマについて新たに論じてみることにした。それと同時に、旧稿を現時点で読み直してみると各所にいたらなさが目立ち、関連テクストの再検討および検討範囲の拡充をつうじて当該テーマにかかわる多数の論点について改めて考え直してみることにしたい。また旧稿では、前半部分ではマルクスの地代論研究について論じ、後半部分では新メガ第Ⅳ部門第18巻に収録予定のマルクスの同時期の（多くは地代や土地所有にかんする文献からの）抜粋ノートの内容紹介とその刊行の意義について論じる、という構成をとったためにマルクスの地代論の内容（とその変化）について突っ込んだ検討がなされていない。上記の「いたらなさ」はこのようなやや中途半端な構成によるものでもあった。今回は旧稿の

---

(1) とりわけ次の文献：斉藤 (2014)、斉藤 (2016c)、佐々木 (2016)、羽島 (2017)、Burkett(2014), Saito(2016a), Saito(2016b)。また、時期的にはややさかのぼるが関連して示唆に富むものとして Foster (2000)。これらの研究は概してマルクスの思想におけるこれまであまり顧みられることなく不当に過小評価ないし誤解されてきた次元（超歴史的な物質代謝 Stoffwechsel と資本の支配によるその攪乱・破壊）に新たな照明をあて、21世紀の現在におけるマルクス思想の復権を唱えようとするものであり、特に1860年代の中葉にマルクスの地代論研究との関連においてリービッヒ（さらにその少し後の時期にはフラース (Fraas, Karl Nicolaus, 1810-75)）の及ぼしたインパクトが強調される。ただしこれらの農業化学者や農学者の著作に示される理論や思想はマルクスの地代論研究と深い関連をもつ――ただし、まだ今後の研究に残された未解明の点も多く存在しているようであるが――とはいえ、彼らは経済学の研究者ではなく、A. スミスが活動した18世紀以来の経済学の歴史を抜きには考えられないマルクスの地代理論の内容の細部にストレートに彼らの議論がかかわるわけではない。またその反対に彼らの著作の内容は地代理論をはるかに超えるものであり、マルクスとの関連もこのような次元で考えることが必要と思われるが、これはもちろん、地代論に課題を限定する本稿の対象外である。このような事情のためか、上に挙げたいくつかの研究ではマルクスの地代理論についての突っ込んだ論究は、特に、その意義の有無を別として戦前来の日本における地代論についての長い研究と論争の経過からみると、直近の問題に引きつけて簡単に論じられるにとどまっているように見える。もちろん、地代論研究が主目的でなければそれでもよいのかも知れないが。

前半部分のテーマに集中することにしたい。そのため、後半部分で扱ったマルクスの抜粋ノート（1864年2月から1868年8月までの期間に作成された12冊）の内容についての紹介と検討は、この間のマルクスの地代論研究に甚大なインパクトをもたらしたと思われるLiebig (Justus, Freiherr von, 1803-73) の *Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agricultur und Physiologie*, 7te Auflage, Braunschweig, Friedrich Vieweg und Sohn, 1862 (Liebig1862) のみに限定したい[(2)]。

以下では、表題に示される本稿の主要テーマに直接的には属さないが、しかしこのテーマの考察にとって重大な関連を有する1860年代以前のマルクスの地代（論）とのかかわりについて、次節以下に予定している議論との関連を考慮しつつざっと一通り見ておきたい。いわば本論理解のための予備的考察である。

a. ジェームズ・アンダーソンとの出会い――1845年の「マンチェスターノート」

エンゲルスの影響のもとに経済学研究を開始した青年時代のマルクスにとって、地代とその理論は当初からおなじみの経済学上のテーマのひとつであったと思われる（1844年の『経済学・哲学手稿』の一部では地代に関連するスミスのテクストからの詳細な引用がなされ評注が付されている）。しかし後年のマルクスが彼の経済学体系の一部として独自の地代理論を構想するようになる時期にいたるまで彼の地代論研究に持続的にインパクトを与えることになったのは、『経済学・哲学草稿』におけるスミスの地代論の研究ではなく、親交を結んだばかりのエンゲルスとともにその翌年の45年7月から8月にかけてイギリスを旅行した際に滞在したマンチェスターでの公共図書館における経済学文献の研究であった。このとき初めてマルクスはイギリスの経済学文献を英語のオリジナルで読んだ（それまではほとんどフランス語訳で読んでいた。上記のスミスからの抜粋もまたリカードからの少数の抜粋もフランス語訳からなされている。）が、読書にあたって抜粋ノート

(2) この抜粋は、アムステルダムの社会史国際研究所から画像ファイルの形でKarl Marx/Friedrich Engels Papers *217*, Inv. nr. B 106 [B 98] としてウェブ上で一般に公開されており、B106という整理番号の付けられたマルクスの手書きノートのS.29からS.135に残されている。本稿ではリービッヒからの抜粋についてはこのオリジナルとともに旧ソ連での解読タイプ原稿をもとにして日本でこの間に作成されたワードファイルも参照した。

を作成するという習慣はこのときにはすでに定着していた。

このときに読んだ経済学文献からの大量の抜粋は現在「マンチェスター・ノート」として知られ新メガ第Ⅳ部門第4巻（IV/4と略記。以下メガの諸巻はすべて同様に略記する）に収録されている（日本では新メガに20年近く先立って杉原・重田(1970)の202-6ページにその概要が紹介されていた)。経済学研究を始めてまだ間もない頃のマルクスがその時代にいたるまでのイギリスの経済学を非常に幅広く研究しようとした跡がうかがえるが、この点で特に注目されるのは同年に刊行されたばかりのマカロックの文献目録・抜粋集(McCulloch1845)にも目をとおしていることである。また、地代論との関連においては、James Anderson, *A calm investigation of the circumstances that have led to the present scarcity of grain in Britain,* London,1801からの抜粋(IV/4, S.62-5)が重要である。この比較的短い抜粋のなかのいくつかの章句は、本稿の次節で詳しく検討する1861-63年草稿の中でもくりかえし引用され、また65年に執筆された『資本論』第三部の地代部分の草稿でもアンダーソンの著作の同じ論点が彼の名とともに言及されている。マルクスのアンダーソンへの注目と高い評価がきわめて早い時期からのものでありしかも持続的であったことが分かる。これらの引用の多くは、リカードの地代論の基本前提（土地豊度の固定性、優等地から劣等地への一方向的な農耕の拡大、土地収穫逓減の法則）に対する根本的な反対ないし懐疑を表明したものである。これはマルクスがリカードの主著『経済学および課税の原理』に含まれる地代論を深く研究するよりも前のことであった。また、上記のマカロックの文献目録には同じアンダーソンの *An Enquiry into the Nature of the Corn laws, with a view to the new Corn Bill proposed for Scotland.* 8 vo. Edinburgh, 1777の本文の一節に付された（彼の地代論の要点を述べた）長い注が引用されている[(3)]が、マルクスはこれからも抜粋を取りこれに次のような短い評注を付している：「地代の真の性質についての最初の説明。彼の1797年に出版された“Recreations in Agriculture, Natural History, Arts”etc.においてもまた同様。」(IV/4, S.187)すなわち、マルクスはすでに1845年の時点でアンダーソンの著作をこのように位置づけていたのである。しかし以上の抜粋や短い評注は、マルクスが後にありうる著述活動のために私的に使用することを目的として書き記したものにすぎず、地代についての彼の見解を私的にも公的にも表明したものではない。

b. プルードン批判とリカードの地代理論――『哲学の貧困』（1847年）

マルクスは、翌46年にはパリ時代以来親密な関係にあったプルードンと断絶し、彼の著書P.-J. Proudhon, *Système des contradictions économiques, ou philosophie de la misère,* tomes 1, 2, Paris, Chez Guillaumin et Cie, Librairie, 1846（『貧困の哲学』（上・下）斉藤悦則訳、平凡社ライブラリー、2014年）が同年の秋に刊行されると、1847年の最初のおよそ半年をかけてその批判のための著作を執筆しこれを出版した(Marx1847)。著作の性格上、その中で扱われる主題も批判の対象である著作に含まれる主題に制約されそれを追いながら自らの議論を展開するということになる。こうして書かれたこの著作[(4)]のなかで、マルクスは「はからずも」（特にリカードの）地代論についての見解をはじめて披瀝することになった（第2章「経済学の形而上学」の終わりから二番目の節である第4節「土地所有または地代」において）。

『哲学の貧困』におけるマルクスは、経済学的な問題においてはリカードを対置するという形でプルードンの主張を批判するという行き方を全体として取っている。特に第1章

---

(3) マカロックによるこの引用によって、アンダーソンの地代理論はそれが書かれてから半世紀以上も後になってはじめて広く知られるようになったと言われているが、この引用の仕方に含まれる大きな問題について加用(1970)には次のような指摘がある：『研究［*An Enquiry,* 1777］』の「この脚注の地代命題の記述が、マカロックによって抄録されているといっても、その抄録の仕方に大きな問題がある。というのは、この脚注は5ページ(45-50)に亘る長文であるが、その抄録は、その脚注の全文でなく、後半の約2ページ分が省略されていることである。内容的には、マカロックの抄録部分は、前述のごとく、抽象的な地代命題の定式化がされている点では、まさしくリカード地代論の先駆的な内容をもつものであるが、それに続く省略された部分には、むしろリカードと対照的に、農業における技術(art)の改良による土地豊度の人工的な増進について述べられているのである。」（11ページ）「マカロックは、リカード理論の継承者として、もっぱらリカードの地代命題の先駆的な定式化がされている部分のみに注目して、これを抄録し、むしろアンダーソンの地代論の特色というべき後半部分の重要性を認識することなく、これを削除したものと推定されるのである。」（12ページ）加用によれば、マルクスはこの後アンダーソンの原典にもあたったにもかかわらず「この脚注部分の記述には気がつかなかった。」（同）しかし、本文に述べたようにマルクスはこの抄録を読んで抜粋する前にアンダーソンの1801年の著作を読んで、まさにここで言われているマカロックが省略した部分に含まれるアンダーソンの主張を摘記していたのであるから、この後にマルクスがリカードの地代論を本格的に研究したとき（その成果は2年後に刊行される『哲学の貧困』(Marx1847)に示されることになる）に彼が両者の地代論を同一視すること、つまり、おそらくマカロックが主観的にも意図していた抄録の与える印象にとらわれることは、なかったと思われる。

(4) 本書は、同年にブリュッセルで行われた講演「賃労働と資本」――単行本としての出版はマルクス没後の1891年――とならんで1840年代における彼の経済学研究の総決算とも言える。実際マルクスは後年にいたるまでこの『哲学の貧困』に言及し続けた――後述――。

における価値論・貨幣論をめぐる論争においてはマルクス自身がリカードになったかのような印象すら与える（ここではまだ後年のリカードの貨幣論に対する厳しい批判はその予知さえ感じさせない）。地代論においても同様のことが言えるが、しかし上に見たように彼はこのときすでにアンダーソンの著作に含まれるリカード理論の前提を疑問に付すような議論を知りそれを評価していた。ここから彼のリカード地代論に対する微妙な位置の取り方が生じているように思われる。このときから 20 年以上が経過していた 1869 年 11 月 26 日にエンゲルスに宛てた手紙のなかで彼は次のように言う：「プルードンに反対した僕の本のなかでは僕はまだまったくリカードの地代論を受け入れていたが、すでにそれについても、彼の（リカードの）立場から見てさえもまちがっている点を論述した。」（MEW,Bd.32,S.401. 強調は原文）たしかにマルクスはこのような両義的な立場をとっていたと言ってよい。

彼はプルードンの地代についての見解をこの節の最初の 3 ページにわたって細かく引用・紹介したうえで、それに反論するかのように、「ここでわれわれは、リカードの学説を、プルードン氏が後生大事にそれを包み込んだ、あたかも神のお告げでもあるかのような、寓意的で神秘的な言葉づかいから解放しよう」(Marx1847, Pléiade, p.120, MEW, Bd.4,S.167) と言って、マルクス自身の理解するリカードを対置する。このために、「すでにわれわれの見たように、リカードの学説によれば」という書き出しから始まる二つの長いパラグラフにおいて、彼は自分自身の言葉でリカードの地代論（後に「差額地代論」と呼ばれることになる）の概要を手際よく忠実に再現している (ibid., pp.120-1, S.168. cf. Ricardo I/69-71)。その上でこの理論が妥当するための条件を次のように規定する：「リカードの学説が一般に妥当しうるためには、なんといっても、次のことが必要である。すなわち、諸資本がさまざまな産業部門に自由に投下されうること、資本家たちのあいだで強力に発達した競争が諸利潤をひとつの等しい率にもたらすこと、借地農は産業資本家にほかならず、自分の資本を土地に投下するにあたってその資本をなんらかの製造業たとえば綿花産業に投下すれば得られる利潤と等しい利潤を要求すること、農業経営が大工業制度に従属していること、最後に、地主それ自身がもはや貨幣収入以外のなにものをも目的としないこと。」(ibid., pp.121-2, S.168-9) ここに述べられていることは、後にマルクスが自分自身の地代論を『資本論』第三部の第六篇として展開するために執筆した草稿の最初

に置いた「a. 緒論 (Einleitendes)」（エンゲルス版では第六篇冒頭の第37章）の冒頭で述べられている彼自身の地代理論の枠組みとほぼ同じ[(5)]である。つまり彼はここで、この枠組みにおいてはリカードの地代論は正当であると認めているということである。

以上のように1840年代後半に書かれた『哲学の貧困』の時点でのマルクスは、一面では地代論を含むリカードの経済理論に（無批判的にと言いうるほど）強く傾倒していたと言えるが、しかしそのことはこの同じリカード理論に対して批判的な視点が彼にまったく欠如していたということではない。同じ第4節「土地所有または地代」のさらに後の方で、彼は土地豊度というものが農業に応用される科学的知識や生産技術さらには農産物価格の上昇・下落といった経済的な条件に依存して変化しうると言う：「地代は土地の豊度の不変指数とはなりえない。なぜならば、近代における化学の応用がたえず地質を変化させるからであり、また地質学上の知識が、今日まさに、相対的な豊度の旧来の評価をまったくくつがえしはじめているからである。イギリスの東部諸地方における広大な土地は、約20年前から開墾されたにすぎないのであって、その時までこれらの土地が未開墾のままに放置されていたのは、腐植土と下層土の成分との関係が十分に理解されていなかったためである。［・・・］豊度というものは、人々が考えるほど自然的な性質ではない。すなわち、それは、現在の社会的関係に密接に結びついているのである。ある土地は、小麦を栽培するためにきわめて肥沃な土地でありうる。だが、［小麦の］市場価格は、耕作者がその土地を人工の牧場に転化することをせまり、それによって、その土地を不毛の土地に化してしまうことを決心させることもありうる。」(ibid., p.125, S.172) これらのことを認めるとすれば、リカードの地代論における地代発生のメカニズムや地代の動態そしてさらにはそれによる資本利潤の動態までがゆらぐことになるであろう。しかし『哲学の貧困』ではこうしたポテンシャルが顕在化することはなく、マルクスのリカード地代論に対する立

---

(5) つまりまったく同じではなく重要な一点において相違が存在する。この「緒論」は絶対地代論を含むマルクスの地代理論全体の序論としておかれている。農業においては土地所有者からの借地が資本投下の前提となるが、このことがこの部門への資本の自由な参入を妨げる要因として作用し、これが自由な資本移動が行われる部門間であれば達成される利潤率の均等化を妨げる。このことがあってはじめて絶対地代が発生しうるが、この時点でのマルクスはリカードと同じようにこうした事態を想定しておらず、一般に地代が発生するための条件として資本の自由な部門間移動を農業にも工業にも同様に求めている。

場はアンビヴァレントなままにとどまった。

マルクスはこの著作を出版した後にも生涯にわたってさまざまな理由により地代の問題について散発的に研究をつづけたが、その結果はいずれも書簡や抜粋ノートそして草稿の形において残されているにすぎない。結局、『哲学の貧困』は生涯を通して彼が地代の問題について自分の見解をおおやけに示した唯一の著作となった。このため彼は後年の草稿や書簡においてこの著作に何度も立ち帰り言及（ないし引用）することになった[(6)(7)]。

---

(6) 新メガ III/7 においてはじめて公表されたアメリカ在住のドイツ人活動家アドルフ・クルス (Adolf Cluß) 宛の 1853 年 10 月 18 日付けの手紙のなか (S.38) で、マルクスは『哲学の貧困』に言及しつつ地代についての自己の見解をクルスに解説している。この手紙は少し前の 10 月 05 日に同じクルスに宛てた手紙でも行われていた地代についての一般的な（初心者向けの）説明の続きでもあったと思われる（やはり III/7 で初公表。SS.26-30）。本書はマルクスにとって地代の問題について自分がすぐに参照しうるまた相手に参照を求めうる唯一の資料だったのであろう。上の例は本書刊行から数年後のことであるが、このことはさらに時間が経過してもマルクスにとっては変わらなかったと思われる。

(7) 1865 年 12 月に執筆された『資本論』第三部のための主要原稿の第 6 章「剰余利潤の地代への転化」の「a. 緒論」の始めの方に当たる個所 (II/4.2,S.671-2) にも『哲学の貧困』への言及があるが、これには以上のような一般的な事情とは異なる特別な理由が存在する。この個所でマルクスは「私はあるところでこのように土地に合体される資本を土地資本 (la terre-capital) と呼んだことがある」(ebenda, S.761)、と言って、本書の p.165 (Marx1847, Pléiade, pp.127-8, MEW, Bd.4,SS.173-4) を挙げているが、この 65 年の草稿の次のページ (II/4.2, S.762) では、彼が旧著で使用したこのフランス語の表現を自らドイツ語で Erde-Kapital（土地資本）と言い直して、この時点での彼の地代理論に属する概念として取り込んでいる。詳細は後論に譲るが、このような概念が生み出されたきっかけが 40 年代におけるプルードンとの論争にありプルードンが彼の著書の中で使用した概念にあるらしいことが明らかになった。『哲学の貧困』のマルクスはこの概念がよほど気にいったのか、第 2 章第四節「土地所有または地代」の最後の 2 ページ (Marx1847, Pléiade, pp.127-8, MEW, Bd.4,SS.173-4) で la terre-capital という表現を 10 回近くも使用している。またこの問題は、アンダーソン以来地代を論ずるさいに何度も浮上していたきわめて困難な問題とも関連しており、リカードも彼が最初に地代について論じた『利潤論』の中の注 (cf. Ricardo IV/18 note) で取り上げ、さらに『原理』第 2 章の地代論の冒頭で (cf. Ricardo I/67-9) ふたたび提起しておきながら後になって (ibid., p.262) 修正を加えざるを得なかった地代論の根本にかかわる重大な問題であった（借地農業者が土地所有者に支払う借地料のどこまでを経済学的な意味での地代と見なすべきか、地代の由来と本性をどのように把握するか、という地代理論の根本問題につながる）。マルクスも主要原稿での関連問題についてのみずからの議論に満足していなかったと見えて、12 年も後の 1876 年に書いたとされる二つの短いメモ (II/14, SS.151-2)（このメモはエンゲルスが『資本論』第三部を編集するにあたって差額地代論の最後にあたる「第 44 章　最劣等耕作地でも生まれる差額地代」の末尾に仕切り線で本文のテキストと隔てて挿入した (II/15, SS. 722-5)）の前者の中でこの問題について論じているが、もちろんこのメモで納得のいく解決が与えられているわけではない。ここでは、マルクスにとってこのようなのちのちまで長く尾を引く地代論上の一難問の発端が『哲学の貧困』の中に埋め込まれていたということだけを指摘するにとどめ、内容的な議論は後段に回すことにしたい。

c.1850年代初頭の「ロンドン・経済学ノート」における地代・農業（化学）研究
――リービッヒ、ジョンストンとの出会い

さて、1847年から48年にかけての経済恐慌とそれにともなうヨーロッパ規模での革命運動の高揚のなかで、積極的にこの運動に加担し活動をつづけていたマルクスは大陸での居住を続けることができなくなり49年8月末にロンドンへの亡命を余儀なくされ、その後の生涯をこの異国の地で過ごすことになった。革命運動の退潮と亡命はしかし彼にとって、約10年後の再来を堅く信じて疑わなかった次回の経済恐慌とそれによる再度の運動の高揚を予期しつつ、それまで中断されがちであった経済学研究を続行し最終的な仕上げをするための好機でもあった。マルクスはロンドンに移住した翌月の9月からさっそく、大英博物館にかよってそこに蓄積されていた当時世界のどこにも他に例のないほど厖大な経済学文献を利用して研究を開始した。この研究のさしあたっての成果が、現在「ロンドン・経済学ノート」として知られる24冊にのぼる多数の抜粋ノートとなって残されている。これらのノートはすでに大部分が新メガの諸巻として刊行され一般に利用しやすい形になっている（1849年9月から51年2月までのノートⅠからⅥはIV/7に、51年3月から51年6月までのノートⅦからⅩはIV/8に、51年7月から51年9月までのノートⅩⅠからⅩⅣはIV/9に、それぞれ収録され現在すでに刊行されている。51年9月から52年6月までのノートⅩⅤからⅩⅧを、続いて52年7月から53年3月までのノートⅩⅨからⅩⅩⅣを、それぞれ収録する予定のIV/10とIV/11の2巻はまだ刊行されていない。）。これらのノートにその跡をとどめている1850年代はじめの約3年間のマルクスの集中的な経済学研究は、その数年後の57年秋から58年春にかけての再度の経済恐慌の到来にともなう彼の経済学研究の総仕上げ（体系的著作としての「経済学批判」の執筆）のこころみの基礎となった。

これらの大量の抜粋ノートは全体として経済学の広い範囲にわたる主題をカバーしており、ここでその内容について立ち入って見て行くことはできないが、本稿のテーマとの関連で特に注目されるのは、新メガ第Ⅳ部門に属する上掲の既刊の各巻（未刊の後半2巻についてもその内容自体は、Sperl (1995) に詳述されており、またマルクスのオリジナル・ノートそのものも社会史国際研究所（アムステルダム）のウェブページ上で画像データとして提供されている）に収録されている「ロンドン・経済学ノート」の前半部分に含まれ

る抜粋の多くが、貨幣・信用理論と地代論との二つのテーマに関連する著作・資料からのものである、ということである。前者に関連するものとして、1850 年 11 月から 12 月にかけて作成されたとされる Heft V に含まれる The Economist. 15 December 1850 からの抜粋 (IV/7, S.358) とそれについてのマルクスの長文のコメント (IV/7, S.358-60)、および、その少し前の Heft IV に含まれるリカードの『原理』第三版の貨幣に関連する部分（第 7 章「外国貿易について」、第 27 章「通貨と銀行について」を含む）からの抜粋 (IV/7, S.316-28)、ならびに、翌 51 年 4 月から 5 月にかけて作成されたとされる Heft VIII に含まれるやはりリカードの『原理』の価値論と地代論に関連する部分（第 1 章「価値について」、第 2 章「地代について」、第 10 章「地代に対する租税」、第 12 章「地租」、第 24 章・第 32 章におけるマルサス・スミスの地代論についての批判、を含む）からの抜粋（地代に関連する部分は IV/8, S.350-72）[8]、がある。

「ロンドン・経済学ノート」でもうひとつ注目されるのが、Liebig (1842) からの長大な抜粋である。この抜粋は 1851 年 7 月から 9 月の間に作成されたとされ、Heft XII の終わりから Heft XIII のはじめまでの合計 30 ページ近くのスペース (IV/9, S.172-213) にわたっており、IV/9 に収録されている抜粋の中では最も長い部類に属する。Heft XI から XIV を収録するこの巻に抜粋が収録されている文献のうち表題から見て農業や地代に関連するテーマを扱っていると思われるものは、S.119-213（XII［7 月］の最初の方から XIII

---

(8) Heft IV においてリカードの主著のこれらの部分からマルクスが抜粋を行っていた（したがってこれらにも注意を払っていた）ということは、1850 年代末以降のマルクスのリカードの扱い方（これらのほとんど全面的な無視）から見て、きわめて注目に値する。実はマルクスによるこれらのリカード抜粋は、旧メガが一旦中断された後に、30 年代半ばまで続いていた旧メガの編集水準・方針をほぼ踏襲するようにしてその後産のような形で、1841 年にモスクワで刊行された 1857-8 年の経済学草稿（現在では『経済学批判要綱』として知られる。新メガでも II/1, 1・2 として 1976 年・1981 年という早い時期に刊行された）に付録として添付されており、これが戦後 1953 年に東ベルリンから再刊された時もそのまま保存されていたのである。戦後新メガに先立って刊行された『要綱』のドイツ語版（おそらく旧メガの時代にその第二部門のうち最初に刊行が予定されていた第一巻としてかなり準備が進んでいたために可能になったと思われる）ではこれらの部分は、それぞれ、Auszüge über Ricardos Geldlehre Dezember 1850 (Marx1953, SS.769-80)、Notizien und Auszüge über Ricardos System März—April 1851 (ebenda, S. 782-839) となっている。「ロンドン・経済学ノート」の一部をなすこれらの抜粋はこのようにすでに 20 世紀の半ばから公表されていたにもかかわらず、『要綱』本文の影に隠れるような場所に置かれていたためか一部をのぞいてこれまでほとんど注目されることがなかったように思われる。これまでの研究でこの資料がもっと検討されていれば、リカードとマルクスの関係についての見方にも何らかの変化があったかもしれない。

[7-8月]の最初の方)、S.276-317（XIIIの終わりの方)、および、S.372-93（XIVの最初の方）にある。最後の二つの個所にはJohnston (James Finlay-Weir)からの抜粋があり両方合わせるとリービッヒからの抜粋を上まわる分量になる(*Lectures on Agricultural Chemistry and Geology,* 2nd ed., London, 1847 [IV/9, S.276-317], *Catechism of Agricultural Chemistry and Geology,* 2nd ed., Edinburgh, 1849 [IV/9, S.372-86])。マルクスはリービッヒとならんでジョンストンにも注目しており、1865年に作成した抜粋ノートB106（新メガ第Ⅳ部門第18巻に収録予定）でも彼の著作から抜粋を行っているが、51年の抜粋には65年に抜粋対象となった*Notes on North America,* 1851は含まれていない(IV/9にもまた未刊のIV/10にも。この年の10月13日付けのエンゲルス宛の手紙でマルクスは彼のことを「いわばイギリスのリービッヒなのだ」(III/4, S.232)と呼び、エンゲルスに本書を手に入れて読むように勧めている。)。

二冊のノートXIIとXIIIにまたがっているリービッヒからの長大な抜粋は、この時期に農業や地代について集中したマルクスが彼の主著（第四版）に注目したことを示している二部からなる著作のうち第一部（Der Proceß der Ernährung der Vegetabilien「植物栄養の過程」）の主要部分から項目を追って丁寧にとられている。対照的に、後の版においてリービヒ自身が削除することになる第二部（Der chemische Proceß der Gährung, Fäulniß und Verwesung「発酵、腐敗、分解の化学的過程」）からはまったく抜粋されていない。マルクスが1865年に再度詳細な抜粋を取ることになる同書の第7版(Liebig1862)ではタイトルからorganischeという言葉が削除され、第一部のタイトルのProceßの前にchemischeという言葉が付加され、そして第二部は新規タイトルDie Naturgesetze des Feldbaues（耕作の自然法則）の下にまったく新たな内容にさしかえられている。十数年を隔てて二度にわたってマルクスが行ったリービッヒの著書からの抜粋の対照的な性格については斉藤(2014)の69-74ページで詳しく論じられている。リービッヒ自身においても、彼が1846年に第6版を出版してから16年後の1862年に第7版を刊行するまでの長い期間は、リービッヒと同じく「無機栄養説」の立場に立ちながら最も重視すべき「無機栄養」の内容について彼と激しく対立したローズ(J.B. Lawes, 1814-1900)とギルバート(J.H. Gilbert, 1814-901)との現実的利害も絡んだ（彼らはともに化学肥料工場を経営し製品の販売によって利益をあげようとしていた）長期にわたる激しい論争を通じて、彼自身の理

論的再考を積み重ね、資本主義の下での近代的農業についてもそれ以前とは異なる新たな立場を構築する過程であった（Liebig1862. 訳者解説の 370-2 ページを参照）。したがって、同じ著者の同一著作の異なる版からの抜粋であるとはいえ、マルクスによる二つの抜粋が大きく異なり抜粋の重点も大きく移行しているのは当然である。加えてリービッヒの理論を受け止めるマルクスの側にも、科学技術の産業への応用についての見方に変化があったであろう。だが、1860 年代に入ってからのマルクスの地代論を主要なテーマとする本稿では、50 年代から 60 年代にかけてのマルクスの地代論をはるかに超える次元の彼の思想の変化について立ち入ることはできない。

d.1850 年代初頭のマルクスの地代論――エンゲルス宛の手紙

以上に見たところから、1840 年代末にロンドンに亡命してからマルクスがその地の利（当時の世界政治・経済におけるロンドンの中心的位置、そこに集積されまた日々集積されつつある厖大な経済学文献資料）を生かして集中的に行った経済学研究の中心テーマのひとつが土地所有・農業・地代といった問題群であったことが理解される。彼は早くも 1851 年 4 月 02 日付けのエンゲルスに宛てた手紙の中で、ロンドンの大英博物館で一年半にわたって続けてきた経済学研究の全体的な感想と見通しについて次のように語っている：「僕はもう五週間で経済学のごたごたは全部片付けられるところまできている。もしこれができれば、家では経済学を仕上げ、博物館ではほかの勉強をすることにする。経済学にはうんざりしてきた。要するに、この科学は A. スミスと D. リカード以後は少しも進歩していないのだ。たとえ個々の研究では、しかも往々にして非常に細かい研究では、たくさんのことがなされているにしても。」(III/4, S.85) この最後の言明は、10 年以上も後の 61 年から 63 年の草稿で取ることになる 19 世紀中葉までの経済学の歴史的動向についての把握を、彼が早くもこの時点ですでに先取りしていたことを示している。そしてその半年後の 1851 年 10 月 13 日付けのエンゲルスに宛てた手紙では、「僕はいま経済学の仕上げにとりかかっている」(ebenda, S.232) とまで宣言している。

しかしこの時期の前後に彼が実際に経済学上の著作の執筆を開始したりまたは少なくともそのプランを立てたりした形跡は存在しない。彼にとってこの時期はまだ主としてそのための予備研究で満たされていた、と言うべきであろう。その中で彼の思考の唯一の発露

は、後に残ることのない口頭での議論を除けば、エンゲルスその他に宛てた手紙だけである。そのうち最も重要なのが51年01月07日付けのエンゲルス宛の手紙とそれに対するエンゲルスの返書である（先に注6で紹介した53年10月のクルス宛の二通の手紙もこの部類に入るかも知れないが、エンゲルス宛の手紙とは理論的重要性の点で大きく異なりここで検討に付すまでもないと考えられる。）。この手紙でマルクスはリカードの地代論に批判的検討を加えつつみずから構想する地代論の大枠を示そうとする。

リカードによれば、「進歩しつつある社会状態」(Ricardo IV/22-3) においては資本蓄積の進展にともなって労働需要と賃金が増大し、このことが食料[9]の需要とその価格上昇を招き、これによってより収益性の低い土地へと耕作が拡大され、地主の所得となる地代が増大する。小麦価格の上昇はつねに地代の増大をともない、両者はつねに正の相関関係にある。これがリカードのシナリオであり、特定の条件をともなう一定の歴史的時期や地理的位置に制約されることなく、多かれ少なかれ普遍妥当性をもつとされる。マルクスがエンゲルス宛の手紙で批判するのはリカード理論のこの一点であり、このリカードの理論を支えている諸前提である。

リカード地代論の諸命題と「歴史はどこでも矛盾している。」(III/4, S.6)「文明の進歩につれて絶えずより劣等な土地種類が耕作されるようになるということは、疑う余地はない。だが、同様に疑う余地がないのは、これらのより劣等な土地種類も、科学や産業の進歩のおかげで、以前の優良地に比べて相対的に優良だということである。」(ebenda) 劣等と見なされていた土地であってもその豊度は不変ではなく、このような土地への耕境の拡大が地代と穀物価格との同時並行的な上昇をもたらすとはかぎらない。リカードの時代以来のイギリスを含めて、「どの国でもわれわれが見出すのは、すでにペティも言ったように、穀物の価格は下がったが一国の地代総額は増大したということである。」(ebenda) マルクスは、このような一見リカードの理論的予想と反するような現象が歴史的にも地理的にも広い範囲で観察されると主張し、これをどう説明するかと問う。このために必要なのは「地代の法則を農業一般の生産性の進歩と矛盾しないように調整するということ」であり、

(9) パンしたがってその原料である小麦。リカードの抽象理論の世界では賃金は事実上全額がこれに費やされると仮定される。したがって、社会の大部分をなす労働者の賃金の大きさが農産物たる小麦に対する需要を左右する。

「ただこれによってのみ、一方では歴史上の諸事実を説明することができ、他方では単に人間だけでなく土地にも及ぶマルサス的劣等化理論が排除されることになる」(ebenda)、として、リカードが地代論おいて描くシナリオが食料供給の困難の増大を論拠として組み立てられているマルサスの人口論と対応していることを指摘する。リカードも技術の改善による農業の生産性の進歩を否認したわけではなかったが、しかしそれは劣悪な条件の土地への耕作の拡大による生産性の低下傾向に比べると極めて散発的であって、この傾向を反転させることはできず穀物価格と地代の並行的な上昇が続かざるをえないと考えていた(Cf. Ricardo, IV/40)。これに対してマルクスは、農業における進歩は十分に現実性があり例外的ではないとして、一意的な収穫逓減の仮定を排除する。これは同時にマルサスの人口論の妥当性を否定することでもある。「いま農業の一般的な改良が行われるようになると仮定しよう。このことを前提すれば、同時にわれわれは、科学も産業も進歩し人口は増加しつつあると仮定するわけだ。」(III/4, S.6) 仮定の上でのこととしながら、ここでのマルクスの、科学技術の産業への応用とそれのもたらす効果についての楽観的な（というよりむしろこれらを積極的に推し進めようとする）姿勢は明らかである。

以上から、マルクスは結論的に、最初の問題であったリカードの地代論と歴史的な事実との折り合いを次のようにつけようとする。これがおそらく、当時のマルクス自身が考えていた地代論の大枠だったのであろう。「(1) 土地生産物の価格が下がっても地代があがるということはありうる。それにもかかわらずリカードの法則はやはり正しい。」(ebenda,S.10. 強調は原文）これはリカードの言っていることをそのまま認めるということではなく、リカードの仮定とは反対に、収穫総量か豊度差のいずれかあるいは双方が大きくなりさえすれば地代は農産物価格とは無関係に大きくなりうる、つまり、収穫逓減がなくても地代の発生と増加はありうる、ということである。こうして地代論とマルサスの人口論とのつながりは絶たれる。こうして、リカードが「(2) ［・・・］最も簡単な命題によって立てている地代の法則は、土地の豊度の低下を前提するものではなく、ただ、社会の発展につれて一般に土地豊度は増大するにもかかわらず、個々の地所の豊度はいろいろに違っているということ、または、同じ土地に次々に投下されて行く資本の成果は違ってくるということを前提するだけである。」(ebenda. 強調は原文）こうしてマルクスが当時構想していた地代論は、一方では後に彼自身が差額地代論（ここでは事実上その第一形

態と第二形態がともに含まれている）と呼ぶことになるリカードの地代理論の側面（実はこれがリカードのオリジナルな発想によるものではないことは後に詳述する）は継承しつつ、他方ではこの理論の基本的前提を取り払うことによって構築されるはずのものであった。最後にマルクスは念をおすように彼の主張の要点を次のように繰り返す：「(3) 土地の改良が一般的であればあるほど、改良はますます多くの土地種類に及ぶであろう。そして、一国全体の地代総額は、穀物価格が一般に下がっても、増大することがありうる。[・・・] 問題は、ただ、[・・・] 最優等地と最劣等地とのあいだにある土地の質がどれほど他種多様であるか、ということだけである。」(ebenda) 以上によって、マルクスが地代にかんして1850年代の初頭に到達した地点が示される。エンゲルスに宛てた私的書簡のなかの文言としてにすぎなかったとはいえ、マルクスがふたたび地代の問題に取り組みこの点を超えて議論を展開することになるのは、10年以上を経過した23冊のノートからなる61-63年草稿のノートX（62年中頃執筆と推定されている）においてはじめてのことだった（詳細は後述）ことを考えると、この51年01月07日付けの手紙に含まれるマルクスの地代論の到達点は、本人の意識にかかわりなく後代から見るとこのときから10年以上にわたって乗り越えられなかったと言えるであろう[10]。

このマルクスの手紙に対してエンゲルスは三週間後の同月29日付けの手紙で回答し、「地代についての君の新説は完全に正しい」(ebenda, S.18) と、マルクスによるリカード批

---

(10) 加用信文はマルクスのこの手紙が「地代論史上にも大きな画期的意義をもつことを強調」（加用1970、29ページ）し、これを「地代論史上注目すべき文献」（同）と評価している。その根拠として加用は、マルクスがこの「書簡ではじめて、収穫逓減法則の否認とともに、リカードの土壌の不可変性の前提を否認して、いわゆる人工的豊度の上での地代形成を主張している」（同）点を挙げる。しかし、本節ですでに見たようにこれらの点はマルクスが1845年にマンチェスターでアンダーソンの著作からの抜粋を取った時から彼に認識されていたし、その二年後に出版したプルードン批判の書『哲学の貧困』の地代を論じた節においても、アンダーソンに言及することなく事実上これらの点を主張していた。だとすれば上のような加用の評価はやや過大であるということになるであろう。また、加用論文が書かれた時代に『哲学の貧困』はすでに知られていて当時は広く読まれていたのであるから、マルクスがすでにこの時点から上記諸点を主張していたことは認識しえたはずである。もちろん、だからといって51年01月07日付けの手紙の大きな意義がなくなるわけではない。この手紙の意義は、プルードン批判のようなある意味で「余計な」要素を介在させることなく、アンダーソンの著作（の一部）から得た知見を元にリカードの地代論の根本的な問題をストレートに批判して、きわめて荒削りだとはいえ自己の地代論の構想の基本点を示してみせたところにあると思われる。

判も含めて彼の見解に全面的に賛意を表明している。それに加えて、「君の解決が正しいものだということには、疑う余地はない。そして、君は地代の経済学者という称号にたいする新たな請求権を獲得したのだ。今なお地上に正義があるとすれば、今や少なくとも一年分の地代総額は君のものであるべきだろう。しかも、それは君が要求できるものとしてはまだ最少のものだろう」(ebenda) などという賛辞を呈し、「今や君はこの問題に決着をつけた。そして、君が経済学の完成と公表とを急がなければならない理由がひとつふえたわけだ」(ebenda, S.21) とまで言っている。もちろんエンゲルスはマルクスの先便の内容に全面的に賛成しその趣旨を納得していたからこのように言うのであろう。しかしこれは、マルクスから届いた手紙が掃除婦の不注意で彼の部屋で山積みの本の下に隠れたままになり、三週間近くも経ってから偶然に発見され、その直後の 29 日にエンゲルスが慌てて返信を書いた、というアクシデントにより返信が異様に遅れ (Cf. ebenda, S.18) 、いつまでも返事がないことに立腹していた（同月 22 日付けのエンゲルス宛の手紙、ebenda, S.13）マルクスをなだめるためのリップサービスでもあった。

この返信のなかでエンゲルスは、科学技術の進歩が土地豊度を向上させそれが農業の生産性を上昇させるというマルクスの主張に全面的に賛成し、彼自身も以前に同様の見解を表明しているとして次のように述べている：「君もおぼえていることと思うが、僕はすでに『独仏年誌』のなかで科学的な農業の進歩を根拠として収穫逓減説に反対した――もちろん非常に粗雑で委曲を尽くさないものではあったが。」(ebenda, S.21) このように言うとき彼が念頭においていたのはもちろん、彼が『独仏年誌』（1844 年 2 月刊。この第 1・2 号の合冊で終わった）に発表しその直後にマルクスが経済学研究をはじめるきっかけとなった論文「国民経済学批判大綱 (Umrisse zu einer Kritik der Nationalökonomie)」であろう。ここでエンゲルスが念頭に置いているのがどの個所か確定できないが、この論文の中には彼の上記の言明に関連すると思われる例えば次のようなくだりがある：「人類の自由にできる生産力は、無限である。土地の収穫力は、資本、労働および科学の応用によって無限に高めることができる。「人口過剰の」グレート・ブリテンは、きわめて有能な経済学や統計学者の計算によれば［・・・］、一〇年間に、現在の六倍の人口をやしなうにたる穀物を生産するような状態にもっていくことができる［したがってマルサスの人口論は完全に失効する］。資本は日ごとに増大し、労働力は人口とともに増加し、科学は日ご

とにますます自然力を人間に従属させる。この無限の生産能力は、意識的にかつ万人のために使用されるならば、人類に課せられる労働をたちまち最小限に軽減するであろう［後のマルクスの自由論も同様の発想に基づく[11]］。競争にまかせられても、それは同じことをするが、しかしそれは対立の内部で行われる[12]。」(I/3, S. 486-7)

科学の力による生産力の無限の発展と人類が手にしうる物質的富の増大またそれによって可能になる人口増加、これらに対するほとんど手放しと言ってよいほどの肯定的で楽観的な見方がここには表明されている。ただしもちろん、「競争」（これがこの時代のエンゲルス、そして彼の影響を受けたマルクスの、資本主義経済を捉える鍵概念であった）の支配する現実の世界では、この科学の力が賃金労働者に長時間労働を強いるとともに生み出された富の圧倒的部分を人口のごく一部に集中させる強力な手段として作用することは、明確に指摘されており、「この無限の生産能力は、意識的にかつ万人のために使用」されるべきだと主張される。だが科学技術ないしその産業（物質的富の生産）への応用そのものに対する懐疑はないといってよい。このような見方が1840年代から50年代にかけてのマルクスとエンゲルスに共有されていたことは確かであるが、その後の彼らの思想遍歴がどのような経路を辿ったのか、また両者のあいだに分岐があったのかどうかは、本稿の課題を大きく超えるテーマである。エンゲルスのこの論文についてだけ言えば、マルクスは1859年の『経済学批判（第一分冊）』でも1867年から後の『資本論』第一部各版でも、繰り返し彼の「盟友」のこの最初期の経済学上の著作に肯定的に言及しその章句を引用している。

e. ロートベルトゥス

以上のようにして1851年01月のうちに地代論をめぐるマルクスとエンゲルスの議論は終息し新たな展開はなかった。特に上記の返答に対しては（これに満足したのであろ

⑾　マルクスは1862年に執筆した経済学草稿のなかでも、次のように述べ青年時代のエンゲルスに通じる思想を表明している：「資本が生み出した生産力の発展を考慮に入れるならば、社会は、必要な物の豊富さを、いま12時間で生産している以上に6時間で生産するであろうし、同時に、万人が6時間の「自由に利用できる時間」を、真の富を、もつであろう。」(XV860、II/3.4,S.1387)

⑿　これに続いてエンゲルスはマルサスの人口論（「この下劣で軽蔑すべき学説、自然と人間に対するこの恐ろしい冒瀆」）(I/3, S. 488) に対する批判を展開している。

うか)マルクスの方からエンゲルスへの反応は何もない。ところが同年の5月19日になって、突然エンゲルスが4か月前のマルクスからの手紙にかかわる新たな事態について知らせる手紙を送った。「最近のニュースは、君が完全にやっつけられているということだ。君は、正しい地代論を発見した、と信じている。君は、自分がリカードの理論をくつがえす最初の人だ、と信じている。気の毒な君よ、君は包囲され、滅ぼされ、撃たれ、殺されたのだ。君の「青銅よりも恒久的な記念碑」[ホラティウス]の全土台はくずされた。きけ、ロートベルトゥス氏がいま彼の『フォン・キルヒマン宛の社会的書簡』の第三巻――18ボーゲン――を公表したのだ。この巻には「地代に関するリカード学説の完全な反駁と新たな地代論の叙述」が含まれているのだ。先週のライプツィヒの『イルストゥリールテ・ツァイトゥング』、今度は君がお目玉をくらうのだ。」(III/4, S.119) この文面から察して、エンゲルスはこの手紙の日付の直前にドイツ国内で発刊された新聞に掲載されたロートベルトゥスの新著の紹介ないし書評を読んで、その内容がマルクスが4が月ほど前に彼に宛てた手紙で述べていたこと（リカード地代論の批判とこれに代わる新たな地代論の創建）とあまりにも似ていることに驚いて、すぐに知らせようとしてこの手紙を書いたと想像される。この本の正確なタイトルは本稿末尾の Rodbertus (1851) の項を参照されたい。タイトルを日本語で表すとおよそ『フォン・キルヒマン宛のロートベルトゥスの社会的書簡。第三書簡：リカードの地代理論の反駁と新しい賃料理論の基礎付け[13]』となるであろう。本文部分は全体で286ページの分量におよぶ。

マルクスの「新しい」地代論はまだどこにも発表されていないのであるから「やっつけられる」ことはありえず、彼が「お目玉をくらう」とすれば、それは今回のロートベルトゥスの著作を無視してテーマの重複する著作を発表したら、というにすぎない。エンゲルスは上記の新聞での本書の紹介記事を読んで、マルクスに自著の執筆にとりかかる前に

---

⑬ それぞれこれとはやや異なるタイトルが付されているが、邦訳は山口正吾による岩波文庫版（1950年改訳版、初訳版は1928年、いずれも訳者による日本語タイトルは上記とは若干異なる）と森三十郎による紀要版（『福岡大学法学論叢』第26巻3·4号、第27巻1号・2号・3号・4号、第28巻1号、1982-4年、邦訳タイトルについては同じく上記とは若干異なる）がある。マルクスが本書から多くの引用を行っている61-63年草稿のノートXとXⅠの邦訳（大月書店刊『マルクス　資本論草稿集』6に収録）も含めて、これまでの日本語による研究文献では多くは山口訳が使われている。

本書に目を通すことを強く勧めるために上のようなやや大げさな言い方をしているのであろう。マルクスもエンゲルスの手紙に含まれる紹介を見れば、この本の内容が彼自身が地代について当時考えていたこととよく似ていることにすぐに気づいたはずである。そして、近いうちに自著の執筆に取りかかるつもりであったならば、エンゲルスが勧めるようにこの本を読んでみようとしたであろう。だがこの手紙に対するマルクスの反応はなく、エンゲルスとのその後のやりとりのなかでロートベルトゥスのこの本が話題にのぼることはまったくなかった。そして、マルクスが1862年の夏にまったく偶然の経緯から本書を読むことになる（詳細は次節）まで、この時から10年以上にわたって無視し続けた。これにはいくつかの理由が考えられるが、もっとも大きいのは、この10年間とりわけ50年代後半に経済学批判の体系化の作業を開始してから彼自身が意図的に地代論から遠ざかっていた（後述）ということであろう。また、マルクスもエンゲルスも手紙や新聞記事でロートベルトゥスについて触れることは何度もあったが、それはドイツの政治家としてであって社会理論家・経済学者としてではなかった。この後者の側面からマルクスが彼についてどのような印象をもっていたにせよ、彼の経済学上の新著をマルクスが長い間無視しつづけたのはこのような事情が関係していたのかもしれない。だが、マルクス没後のエンゲルスの晩年には、ロートベルトゥスは自分が先に発表した理論をマルクスが剽窃したと主張し、エンゲルスはその反論に手を焼くことになる（彼の編集した『資本論』第二部（1885年刊）と第三部（1894年刊）のいずれの編者「序文」でも彼はこの問題に相当のスペースを割かなければならなかった）。彼らとロートベルトゥスとの関わりの多くはこのような積極的な意味のないものであった。

f.「経済学批判」の体系プランにおける土地所有（地代）の理論

さて、51年末にはフランスでルイ・ボナパルトによるクーデターが勃発してマルクスはこれを分析した著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の執筆に従事したり、また生活費の工面のために『ニューヨーク・ディリー・トリビューン』紙への定期的な寄稿をはじめたりしたため、この時期以降彼の経済学研究は中断されがちになった。しかし、56年の秋から国際金融市場に新たな恐慌の兆候が現れはじめ翌年秋には史上初と言われる世界市場恐慌が勃発した。マルクスはこれを機に経済学研究を再開し、恐慌に

つづく「嵐のような外部の運動」（58 年 2 月 22 日付けのラッサール宛の手紙、III/9, S.73）によって妨げられる前に経済学の体系的著作を仕上げようとした。「僕は毎晩、夜を徹して、気違いのように、経済学研究の取りまとめにかかっている、大洪水の来るまえに、せめて要綱だけでもはっきりさせておこうと思って。」（57 年 12 月 08 日付けのエンゲルス宛の手紙、III/8, S.225）このようにして翌年 3 月までの約 6 か月という短い期間でマルクスは七冊のノートに現在『経済学批判要綱』(II/1.1,2) として知られる最初の草稿を書き上げた。この草稿の冒頭に「経済学批判序説」として知られる未完の方法論的序説を置いたが、その「(3) 経済学の方法」という項目の最後に方法論の具体化として彼の経済学の体系のプランを初めて書いた。

このプランは次のように構成されている。やや長くなるが土地所有や地代がそこでどのように位置づけられているかを確認するために全体を引用する：「1. 一般的抽象的諸規定、それゆえ多かれ少なかれすべての社会形態に属するが、しかし上に吟味検討した意味において。2. ブルジョア社会の内的編成をなし基本的諸階級が立脚する諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それらの相互関係。国家と土地。三つの大きな社会階級。それらのあいだの交換。流通。（私的）信用制度。3. 国家の形態でのブルジョア社会の総括。それ自身に対する関係において考察される。「不生産的」階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。4. 生産の国際的関係。国際分業。国際交換。輸出入。為替相場。5. 世界市場と恐慌。」(I/1.1, S.43) これはマルクスがこれから実際に経済学の体系的著作の執筆にとりかかろうとするにあたって、方法論的省察を経て試行的に最初に（自分に対して）示した叙述プランである。このプランそのものは彼独自の方法論に立脚しているとはいえ、そこに挙げられている個々の題材（素材）は彼のそれまでの経済学研究とりわけ J. スチュアートと A. スミスのそれぞれに異なった性格の体系的著作の内容を彷彿とさせるものである。ここに初めて示されたマルクスのプランは、最初のやや雑多な記述の後に「貨幣章」からはじまる『要綱』のテクストの実際の執筆を通じて、徐々にその具体的な内容を与えられ部分的に補正されて行くが、全体の大きな枠組みはその後も根本的に変化することはなかった。

この『要綱』執筆完了直後の 58 年 4 月 02 日にエンゲルスに宛てた手紙で、マルクスはこれから書こうとしている著作の内容を説明するためのプランを示している。ここでは上のプランが整理されるとともに、実際に書かれはじめている最初の部分の内容がより詳細

になっている。本稿のテーマに関連する部分を摘記すると次のようになる：「全体は六巻に分けることにしている。(1) 資本について。(2) 土地所有。(3) 賃労働。(4) 国家。(5) 国際貿易。(6) 世界市場。／Ⅰ　資本は四つの篇に分かれる。(a) 資本一般。（これが第一分冊の題材だ。）(b) 競争、すなわち多数資本の対相互行動。(c) 信用。[・・・]」(III/9, S.122. 強調は原文。／はパラグラフの変わり目）最初に「体系」の全体にかかわる大枠（ここでは六つの項目からなるとされているが大まかには上に引用した『要綱』の最初に出てくるプランと同じ）が示され、続いてその第一項目をなす「(1) 資本について」の内容がさらに細かく規定されている。そしてマルクスはさらにこの「資本」の第一項目をなす「(a) 資本一般」の内容に立ち入った説明を加え、そのまた最初の項目である価値（商品）と貨幣についてさらに立ち入った内容を示し（これは事実上翌年刊行されることになる『経済学批判（第一分冊)』のかなり詳細な予告になっている)、エンゲルスの意見を求めている。

この部分の最初は次のように書かれている：「Ⅰ　資本。第一篇。資本一般。（この篇の全体をつうじて、賃金はつねにその最低限に等しい、ということが前提される。賃金そのものの諸運動や最低限の低下または上昇は賃労働の考察に属する。さらに、土地所有はゼロと仮定される。すなわち、特殊な問題としての土地所有はここではまだ問題にならない。[・・・])。(ebenda. 強調は原文）これに続いて、後に実質的に『資本論［正確にはまさにこのプランに書かれているように「Das Kapital 資本」]』全三部の内容を示すこととなる「資本一般」の内容諸項目がより具体的に示される[14]。マルクスは括弧に囲まれた部分で、この「資本一般」では事実上賃金の運動と地代そのものが捨象されると言い、これらが最初に示される大枠のプランの第二・第三番目の項目においてはじめて論じられるとしている。この「土地所有はゼロ」つまり地代は存在しないという仮定は、『要綱』の執筆を開

---

(14)　この翌年6月に刊行された『経済学批判（第一分冊)』の「序言 (Vorwort)」の冒頭で、マルクスは「世界市場」まで包括する六つの部分からなるプランを示して、この著作が彼の壮大な体系において占める位置を明らかにしている。マルクスの生前にプランがおおやけにされたのはこのときだけであった。『要綱』本文中に書き込まれたいくつかのプランをはじめ、この後もマルクスは手紙や草稿において彼の経済学体系の著述プランを何度か書いているが、それらはいずれも、最初の「資本」の項目の第一部分をなす「資本一般」の内容を拡大して詳細に提示するものであり、それ以後の部分はすべて1859年までになされた漠然とした大項目の提示に終わっている。当初の全体的な体系の構想に基づいて始まりの部分の執筆を進めて行くにつれて、「賃労働」から後の部分はすべて当面の課題から遠のいて行ったからであろう。

始してから 1862 年の夏にいたるまでの数年間にわたって、マルクスが地代の理論的扱いについて維持した立場であった。したがってこの期間において彼は地代を論考の主題としたことはなかった。このことは当然、『要綱』のテクスト全体に対してもまたその最初の部分を元に書かれた『経済学批判（第一分冊）』に対しても妥当する。

この地点からみると、以上に見てきた 1850 年代初頭までのマルクスの地代についての議論は、彼が早くから漠然とした形で考えていた経済学の体系的著作の中に位置づけられたテーマの一部であったというよりも、むしろ、彼の時代までの経済学の中のひとつのトピックスとして他の諸テーマ（この時期までに特に重要であったのは貨幣・信用）との相互の関連を意識することなく個別になされた研究の所産であったと言えよう。この点では、彼の地代についての見解がおおやけにされた唯一の刊行物である『哲学の貧困』も変わりはない。しかし、彼はこの著作におけるようにある意味で状況に強いられて地代について論じる以外に、エンゲルスの言うようにみずから進んでこのような性格の論文を「地代の経済学者」(III/4, S.18) として「地代一般についての君の論文をイギリスの雑誌に載せる」(ebenda, S.21) ようなことはしようとはせず、そのままにしておいた。しかしこのことが、今日「マルクスの地代論」として知られる、1865 年執筆の草稿の第 6 章（およびこれに編集を加えたエンゲルス版『資本論』第三部第六篇）とその事実上の準備である 61-63 年草稿におけるマルクスの地代論研究の成果に対して、彼自身の理論的・歴史的前提として生かされている（後に見るようにこの両方の草稿において彼が直接に言及しているのは『哲学の貧困』の当該個所だけであるとしても）ことは間違いないであろう。本論にさきだつこの前書きで、本稿の中心テーマからやや外れるかに見える事項についてやや過大な紙幅をあてて見てきたゆえんである。

2.1861-63 年草稿におけるマルクスの地代（論）研究
—— 絶対地代と差額地代 ——

a.「5 剰余価値に関する諸学説」へのロートベルトゥスの地代論の「闖入」

遅れていた『経済学批判（第一分冊）』の刊行がようやく実現する 1859 年 6 月に先立って、その原稿の執筆と発送が完了した直後の同年 2 月には、マルクスは早くもその第二分冊の準備に取りかかろうとしたが、経済的困窮と健康状態の悪化それに国際労働者運動への積

極的な関与（党派争いのために余儀なくされた『フォークト君』の執筆を含む）、これらにより彼の経済学研究は中断を余儀なくされた。また金策のため61年の3月から4月にかけて2か月間ヨーロッパ大陸の各地を旅行して久しぶりに親族を訪れるとともに、その途中の3月中旬からの約1か月間はラッサールの客としてベルリンに滞在した。こうした経過を経て彼が経済学批判の続きの執筆を再開することができたのはようやくその年の8月になってからのことであった。第一分冊の直接の続きとしてすでに『要綱』においてその大綱が出来ていた「1 貨幣の資本への転化」から「2 絶対的剰余価値」そして「3 相対的剰余価値」まで書き進んだところで、第一分冊と同様にこれらの主題についての学説史的な補論つまり「5 剰余価値に関する諸学説」[15]（現在では『剰余価値学説史』として知られる）の執筆を開始した。当初マルクスは、第一分冊における同様の趣旨の補論と同じくこの補論も本論部分を補完する比較的短いものになると考えていたようであるが、書き進めていくうちに長大な「学説史」に膨らんでいった。これが61-63年草稿がそれ以前のマルクスの経済学草稿には例のない長さ(23冊のノートを含む。ノートの分量で1472ページ。新メガでは6分冊(II/3.1-6)3000ページ近く）になった原因である。

学説史部分が当初のマルクスの予想を超えてはるかに長くなった（このため第二分冊の仕上げと出版は当面見込めなくなった）ことにはいくつかの原因があるが、これらの原因のうち、当初の予定になかったはずの地代に関する理論的・学説史的検討が「割り込んだ」ことが主要なもののひとつである。マルクスは第二分冊の執筆を始めるにあたって、第一分冊を書いていた1858年から59年にかけての時期と同じく、「土地所有はゼロ」したがって地代もないものと想定しており、地代について論じる予定はまったくなかった。その地代についての論考がこの草稿で多くのスペースを占めたのはひとつの偶発的な事情の介在による。「5 剰余価値に関する諸学説」は、ノート第Ⅵ冊（新メガではこの草稿を収録する第Ⅱ部門第3巻の第二分冊（II/3.2）の始め）から始まっており（この部分の執筆開始は62年1月から2月とされる）、このテーマに関連してa, b, c … とアルファベット順に項目を設けて、およそ年代順に各経済学者・学派の所説に対してマルクスが

⒂ 「3 相対的剰余価値」と「5 剰余価値に関する諸学説」の間に4という番号を付した項目が予定されていたと考えられるが、61-63年草稿の中にはこれに該当することを示す項目はない。

直前までに展開した自分の理論的立場から詳細な批判的分析を加え論評している。ところが、項目「f ブレイ (J.F.)『労働の害悪と労働の救済策…』、リーズ、1839 年」がノート X の 444 ページで終わったあと、それに続く項目はそれまでの剰余価値学説についての学史的検討から外れて「g ロートベルトゥス氏［・・・］」とされ、マルクスは彼の著作 (Rodbertus1851) における地代理論の検討に移っている。これが次のノート XI の 522 ページ（ページ番号は複数のノートを通じて通し番号になっている）まで続く（メガでは第三分冊のはじめにあたる II/3.3, S.673-813）。そしてこの後に「h リカード」が続くがこの項で「剰余価値に関するリカードの理論」が取り上げられるのは次のノート XII の 636 ページ (II/3.3, S.1001) になってからのことであり、それまでのノート 522 ページから 636 ページまで (II/3.3, S.814-1001) で批判的検討に付されているテーマはリカードの剰余価値論ではなく、彼の利潤論、平均価格論、市場価格論、地代論であり、おそらくこれに関連してであろうが「A. スミスの地代論」までここに入っている（ノート XII の 619 ページから 636 ページ、II/3.3, S.968-1001）。

このように、ノート X から XII までの 200 ページ弱（メガのページ数では 330 ページ近く）という大きなスペースのなかで、草稿の執筆開始時にはマルクスが予想していなかった主題にかんする学説史的検討とそれを受けて彼自身の地代論に新たな展開がなされたのは、この直前までの彼の草稿執筆（経済学研究）の過程にその何らかの理由が内在していたからではなく、彼の経済学研究のそれまでの進展とはとりあえず無関係な偶発的出来事の所作であった。事の始まりは、本節の最初に言及した 1861 年春の大陸旅行中にマルクスがベルリンでラッサール宅にしばらく滞在した時のことにさかのぼる[16]。この滞在期間中マルクスはラッサールとの政治活動上の協力についての相談をはじめさまざまな活動を展開したが、ここで重要なのはこの時にマルクスがラッサールの蔵書から多数の経済学書を借り受け、この中に上記のロートベルトゥスの著作とロッシャーの著作（Roscher, Wilhelm: *System der Volkswirtschaft. Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmänner und Studierende.* Bd. i. Die Grundlagen der National Ökonomie. Stuttgart, Tübingen: Cotta 1854）が含まれていたことである。ロートベルトゥスの本を借りたのは、ラッサールからそれを読むように勧められたからか、あるいは、以前から気になっていながらずるずると検討を先延ばしにしていた本を彼の蔵書の中に見つけたからであろう[17]。

マルクスはロンドンに帰ってしばらくしてラッサールに宛てた5月08日付けの手紙の中で、本を借りたことに対する謝辞であろうかロートベルトゥスの著作について、「そのなかにあるよいものは新しくないし、新しいものはよくない」(III/11, S.467) とごく一般的抽象的な形でむしろ否定的な評価を下している。4月末に長旅から帰宅してから10日も経たない時点で書かれた手紙であり、この時マルクスが仮に300ページ近くにものぼるロートベルトゥスの著作を読んでいたとしてもそれほど丁寧にではなかったであろう。また、1861年を含む時期のマルクスの抜粋ノートにもロートベルトゥスからの抜粋は含まれていない (Sperl1995)。こうしたことから、上の手紙の文句は通り一遍の挨拶でしかな

---

⑯　以下のマルクスの61年のベルリン滞在およびラッサールの62年のロンドン滞在についての記述は、MEL Institut (1934) の当該個所による。フェルディナント・ラッサール (Ferdinand Lassalle, 1825-64) は、ドイツの社会主義者であり（いわゆるラッサール派の指導者として知られる）労働運動の指導者でもあったし、多数の著作を刊行してもいる。マルクス、エンゲルスとも親交があったが、政治上・理論上の意見の対立から概して彼らとの関係は良好ではなかった。だが、マルクスもエンゲルスもラッサールが没する直前の決定的な断交にいたるまでは、彼のドイツ国内での労働運動や出版業界に対する影響力などを考慮して、協力関係を維持するために表面上はなるべく穏便を保つように努め長い間文通関係を続けた。マルクスは『要綱』を書き上げた1858年3月の時点で、ラッサールの仲介により、ベルリンのドゥンカーとの『経済学批判』シリーズの出版契約を締結し、実際にその第一分冊を翌年6月に出版した。この意味ではこの出版企画はラッサールに負っていると言えるが、他方でマルクスは同年2月末に発送した原稿の出版が6月まで遅延したのを出版社の怠慢よりもむしろラッサールの「妨害」（5月24日付けのエンゲルス宛の手紙、III/9, S.437）のせいだと考えて、この間彼に対する怒りを募らせた（同じくエンゲルス宛の次の日付の手紙を参照：3月10日・25日、4月12日、5月25日・28日、6月7日・10日）。ラッサールとマルクス、エンゲルスとの関係については以上にとどめておく。

⑰　エンゲルスは彼の編集した『資本論』第二部への「序文」（1885年）の中で次のように述べている：「マルクスは、1859年ころはじめてラッサールからロートベルトゥスという経済学者もいるということを聞いたのであり、またその後大英博物館でロートベルトゥスの『第三社会書簡』を見つけたのである。」(II/13, S.11) この文章は、マルクスが自分の理論（価値論・剰余価値論）を「剽窃した」というロートベルトゥス（と彼の支持者たち）の主張に対する反駁という文脈で出てくる。ここで言及されているロートベルトゥスの著作について最初にマルクスに知らせたのはエンゲルス自身であったし、それは1859年よりはるかに早い1851年であった。エンゲルスはすでに30年以上も前のこのことを忘れていたのであろうか。エンゲルスは、マルクスの死後彼が残した厖大な草稿や抜粋ノートを全体にわたって精査し、その内容や作成時期についても知っていたので、マルクスが60年代のはじめに書いた草稿の一部でロートベルトゥスの上記の著作について詳しく論じていることも分かっていたはずである。しかしマルクスが本書を61年にラッサールから借りて62年になって返却をせまられ、あわてて読んで上の草稿を書いたということは知らなかったのであろうか。エンゲルスの言うように、もし59年にマルクスがこの本を大英博物館で見つけていつでも利用可能であったのなら、その二年後にわざわざベルリンのラッサールから借りる必要はなかったはずである。マルクスとロートベルトゥスのこの著作との関係についてのエンゲルスの1885年の証言にはこのような疑問が残る。

いのではないかと判断される。また逆に、この言葉はもともとマルクスがロートベルトゥスに対してこれに類する印象を抱いていたこと、それゆえに彼の著作を無視し続けたことを示しているのかも知れない。事実これからあと、マルクスはこの本をラッサールから借りておきながら、一年以上も放置したままにしておいたのである。

ところがそれから一年以上たった 62 年 6 月 09 日付けで、マルクスに宛てた手紙でラッサールは突然次のように宣告してきた：「もし僕が 7 月に自分でロンドンまでひと飛びで行くことができず――おおいにありうることだが――、多分そうなるのではと思うが僕が自分で持って帰ることができなかったなら、君に持たせてやった書籍（ロートベルトゥス、ロッシャー、その他）もまた 10 月はじめには送り返してくれたまえ。行きたいとは思っているが、しかしまだ決めてはいない。」（III/12, S.129. この手紙はメガのこの巻で 2013 年に初めて公表された。強調は原文）ラッサールがこの手紙でロンドンに行くことをほのめかしているのは、この年の 5 月から開催されていたロンドン万博を見物するつもりだったからである。おそらくマルクスはこの手紙を受け取ってからすぐに、その時執筆中であった「5 剰余価値に関する諸学説」を項目「f ブレイ［・・・］」（前述）あたりで打ち切って、借りておきながら一年以上も置いたままにしていたロートベルトゥスの著作に急に思い出したように向かったのではないかと思われる。マルクスはラッサールからの手紙を受け取ってからおよそ一週間後の 6 月 16 日付けの返信で、今やっとロートベルトゥスの著作に取り組んでおりこの書物に対する上に見たような以前の評価を見直したこと、本書のなかに新たに見いだしたことについて次のように報告している：「ロートベルトゥスとロッシャーにかんする君の警告を見て、僕は最初からの、また両者についての覚え書きをこれから作らなければならないことを思い出した。ロートベルトゥスについては、君に出した最初の手紙［上に引用］では僕は彼を十分正当には評価しなかった。そこには実際すぐれた点もたくさんある。ただ彼の新しい地代論の試みは幼稚で、こっけいだといってもよい。［・・・］ロートベルトゥスが引き出しているような結論では、借地農が地代を支払うのは彼の利潤率がマニュファクチュアの場合より高いからだということにほかならない。［・・・］リカードの地代論は、いまの書き方だと、文句なくまちがっているが、それにたいして出された反論はどれも、誤解であるか、そうでなくともせいぜい、ある種の諸現象が一見したところリカードの理論と一致しないという

ことを示しているだけだ。［・・・］ロートベルトゥス氏の積極的な解決はたしかに幼稚ではあろうが、正しい傾向を含んでいる。」(III/12, S.133)

以上の文面からは、マルクスが今ようやく（エンゲルスからの警告から11年ぶり、ラッサールから借りてから1年ぶりに）ロートベルトゥスの著作に本気で取り組んでいることが見えてくる。マルクスはこの著作に「すぐれた点」や「正しい傾向」があることを認めている。ただしロートベルトゥスの積極理論に対しては相変わらず厳しい見方をしている。マルクスがここに見いだし彼自身の新しい理論的展開の起点としたのは、農業と工業の部門間での利潤率の構造的な相違についての認識であり、リカードの理論においてはこの点がまったく欠落していることに対する批判である。ロートベルトゥスの提起する新しい地代論には依然として否定的な態度を取っているが、しかし以前とは異なりこれは彼の著書を深く読み込んだ上でのことである。いずれにしても、ラッサールからの「催告」が思わぬきっかけとなって、マルクスはこの時から50年代初頭に達成された地点を越えて（もちろんそれをふまえつつ）地代論の新たな地平を切り拓いていくことになる。上の手紙に含まれる文言は彼が執筆中であった草稿のノートXの445ページからはじまる地代についての長大な論考に含まれるいくつかの重要論点を先取りするものである。実際この長大な論考が展開されているノートXからXIは1862年6月から8月ごろにかけて執筆されたとされる。またその開始時点は上に見た手紙のやりとりの頃と考えられる。なお、ロートベルトゥスの著作はいきなりマルクスの執筆していた草稿の途中で検討が行われているだけで、通常であれば草稿執筆に先立って作成される読書抜粋ノートはロートベルトゥスにかんしては結局作成されないままであった。このような例はあってもきわめて少数であると思われるが、これはラッサールからの返却の催促のためそこまで時間的余裕がなかったからかも知れない。

マルクスは上の手紙の二日後の6月18日にはエンゲルスに宛てた手紙で、「今ではついに地代の問題も片づいた（といっても、この部分ではそれをただ暗示しようとさえも思っていないのだが）。僕はずっと以前からリカードの理論の十分な正しさについては疑念をもっていたのだが、ついにそのごまかしも発見した」(ebenda, S.136) と告げている。ここでマルクスは「ずっと以前」つまり10年以上前の1851年の頃の自分の地代研究を想起して、長い中断が入ったとはいえ問題意識と研究の連続性を確認している。ロートベル

トゥスの著作は同時にリカード批判の書でもあったので、マルクスもそれに合わせておそらく前者の著作の検討に取りかかるまでは予定していなかったリカードの地代論の本格的な批判にも深入りすることになった（前述）。さらにマルクスは、ラッサールからの「警告」に促されて急遽ふたたび地代の問題に立ち帰って問題の解決（少なくともその見通し）を得たと思ったにもかかわらず、このことは彼が50年代末以来取り組んでいた「経済学の仕上げ」とは直接には関係しない（「この部分［つまり彼が現に執筆にいそしんでいる「資本一般」］ではそれを暗示しようとさえも思っていない」）いわば一時的な間に合わせの脇道にすぎないと、この時点では考えていたことが分かる。だが地代論の扱いについてのこのようなマルクスの態度は、これから2か月もたたないうちに大きく変化することになる。

なお、マルクスは上に紹介したロートベルトゥスに対する新たな評価を含む手紙の中で、次のようにラッサールの来訪を歓迎する意向を表明している：「君にここで会えたなら、わが家の者はみんなよろこぶだろう。僕自身のことはさておき、僕の家族のためにうれしいことなのだ。なにしろ彼らは、僕のイギリス、ドイツ、フランスの知人がロンドンの外に居を構えてからというもの、「人間」にほとんど一人として会っていないのだから。」(ebenda, S.134) 歓迎の意向は外交辞令であろうが、その理由として言われていることは真実に近い（マルクス一家はロンドンではほとんど人付き合いがなかった）。7月になるとラッサールは実際にロンドンにやってきて、マルクスの家に7月09日から約一か月間滞在した。マルクスは一年前に同様の期間ベルリンで彼の家に滞在した手前、体面を取りつくろうために家財道具や衣類までを質に入れて金銭を工面し自宅でラッサールをもてなした。この間彼とは労働運動や政治問題そして出版の企画について話し合ったが概して意見が折り合わず、マルクスは彼の態度や風采についてまでエンゲルスにあれこれ不満をもらしており、彼のロンドン滞在はマルクスにとって愉快なものではなかったようである（7月30日付けと8月07日付けのエンゲルス宛の手紙、ebenda, S.171-3, 174）。しかし決定的な決裂は互いに回避しようとした。

ラッサールは6月初旬の手紙で、もし7月にロンドンに行くことになったら一年前に貸していたロートベルトゥス、ロッシャーを含む何冊かの本をマルクスから取り戻して持って帰ると告げていた。そのためマルクスは慌ててこれらの本を研究したのであった。しかしラッサールがロンドンを離れてから3か月後の11月07日に彼に宛てた手紙でマルクス

は次のように書いている：「ロッシャーを君に送ろうと思ったが、送料が一〇シリングで、ロッシャーの価値ではないとしてもその価格と同じだということに気づいた。いずれ近く折りをみて、と思っている。」(ebenda, S.268) つまりマルクスはまだこのときロッシャーの本を返さないで持っていたということである。文面にはロッシャーしか出てこないので問題のロートベルトゥスの本がどうなったのか手紙の文面からは不明である。IV/32 に収録されているマルクスの蔵書目録にはロッシャーの先に挙げた著作が含まれている (Cf. ebenda, S.558) が、ロートベルトゥスの著作は含まれていない。この著作はラッサールの帰国前に実際に返却されていたのかも知れない。しかしこの時以降ラッサールとのやりとりでマルクスが借りた本について話題になることはなかった。そしてその二年後の 64 年 8 月にラッサールが決闘事件で四〇歳を迎える前に死亡し、この件はお蔵入りとなったのであろう。

マルクスとしては、ラッサールが帰国の途につく予定の 8 月上旬が返却期限と考えてそれまでに本書の研究を済ませておこうと努めたと思われる。実際、この年の 8 月 02 日と 09 日に宛てたエンゲルスの手紙（特に前者）において、この時期に彼がおこなった地代についての研究の少なからぬ成果について報告しているが、その内容は彼の草稿ノートで「g ロートベルトゥス氏」と題された項目のはじめから「h リカード」の項目の途中（II/3.3, S.930 あたり）までの内容といくつもの点で照応が見られる。「厚かましい来客」に 1 か月近くものあいだ時間を取られ仕事を妨げられていた（cf. エンゲルス宛の上掲 7 月 30 日付けの手紙、ebenda, S.171）にもかかわらず、マルクスは遅くとも 8 月初旬までには、彼の草稿ノート 150 ページ（メガのページ建てではおよそ 260 ページ）分を満たして地代についての論考をほぼ終えていたようである。これらの手紙はほぼ同時に書かれていた草稿との間にこのような関係があるので、草稿の関連個所とともに取り上げることにする。

b. 資本主義における工業と農業、剰余価値と利潤

もともと 1859 年に刊行された『経済学批判（第一分冊）』の直接の続きをなす第二分冊を準備するために書き始められた 61-63 年草稿は、「第三章　資本一般」の「I 資本の生産過程」の「3 相対的剰余価値」のところまで書き進められたところで、第一分冊の構成にならって直前までの理論領域に対応する学説史的考察をなす「5 剰余価値に関する諸理

論」に入って行く。この理論史的叙述は、マルクスが若い頃から重視していたジェームズ・スチュアートから始まり、ほぼ年代をおって展開されて行くが、その中にあって「g ロートベルトゥス氏」（1851 年）は「h リカード」（1817-21 年）の前に置かれておりやや変則的なあつかいとなっている。これはもちろん、上に触れたように、マルクスが彼自身の計画にしたがって草稿の執筆を進めていたところに、突然外的な制約が加わったために急遽ロートベルトゥスを取り上げざるを得なくなったために生じた変則性であり、この直前の「f ブレイ」までの学説史的考察の流れとの関連は、単なる時間的な前後関係以外にはないといってよい。61 年 8 月に草稿の執筆を開始したときから「f ブレイ」にいたるまで、マルクスは地代の問題を主題的論考の対象としたことはまったくなかったし、これを「剰余価値に関する諸学説」に含める予定もなかった。また、ロートベルトゥスに続いて検討の対象とされているリカードは、ケネーやスミスなど 18 世紀の経済学者の後に当然取り上げられるはずであったが、しかし、「g ロートベルトゥス氏」につづく「h リカード」（特にその前半部分）では、前者におけるリカード地代論の批判に関連する論点が中心を占めている。ロートベルトゥスがリカードの地代論を批判しつつ提起する彼自身の「新しい」地代論を批判しようとして、マルクスはおのずとリカードに対する批判的検討に引き込まれていったと思われる。こうして期せずして、マルクスはここでリカードの地代理論について彼の生涯におけるもっとも徹底した批判的吟味を遂行することになった。われわれがここで検討の対象としようとする 61-63 年草稿の部分（II/3.3 の最初のおよそ三分の二を占める）は、以上のようにマルクスが当初予定していたのとはかなり違った形をとっているのではないかと思われる[18]。

さて、マルクスは検討の対象とするロートベルトゥスの著作の表題を最初に掲げているにもかかわらず、項目「g」を書き始めてしばらくのうちはこの著作から直接に文言を引いて論評を加えるというスタイルはとらず（もちろんこの著作そのものを読み進めていたことは草稿の文面からあきらかであるが）、むしろこの著作の検討をきっかけとして彼自身の新たな地代理論の展開をはかるための枠組みを整える作業に重点をおいているように思われる。問題の中心は農業と工業との対比、両者の相違とりわけ前者を後者と区別する特質である。もちろん、農業が工業と同じように利潤の獲得を目的として賃労働の雇用と搾取によっていとなまれる資本投下の無差別な一部面である、ということが地代論の基本

前提であり、問題はその上での両者の相違・区別であるが。

マルクスは農業と工業の生産力の発展のありかたが一意的に定まっているのではなく、歴史状況依存的であることを強調し、ジェームズ・スチュアートが述べたように工業の出現と発展は農業の発展を前提とするものであり「最初は農業の方が生産的であった」(II/3.3,S.676) ことを強調する。資本主義が出現して以後の一定の歴史的時代において工業の生産力の発展が農業のそれを上まわった（ただし農業の生産力が次第に低下していくことはない、とマルクスは考える）という事実があったとしても、この状況が不変であると考えなければならない理由はなく、関係の逆転は可能である（上の引用文に述べられている点を含めて、農工両部門の生産力の発達の歴史的可変性については、同じく「g ローベルトゥス氏」に属する II/3.3,S.762 でも論じられている）。「農業は、たとえ絶対的にはより生産的になったとしても、相対的にはより不生産的になったのである。このことは、単にブルジョア的生産と、それに固有な諸矛盾とのまったく奇妙な発展を示しているにすぎない。」（ebenda. 強調は原文）

また農業でも工業と同様に、その生産過程つまり播種・栽培・収穫等を含む農産物の生産は資本による剰余価値の生産であるが、その条件は両部門では大きく異なる。「農業では、労働時間の絶対的な延長――したがって絶対的剰余価値の増大――は、わずかな程度でしか許されない。農業では、ガス灯のあかりで労働するなどということはできない。もちろ

---

⑱　以下、マルクスがロートベルトゥスの 1851 年の著作の批判的検討を手掛かりとしながらどのようにして彼自身の 1850 年代の地代論を超えるあらたな理論的展開を遂げて行ったのかを見て行くが、この過程においてロートベルトゥスの理論が積極的に果たした役割はほとんどなく、彼の理論に対するマルクスの評価も概して否定的なものである。たとえば、『資本論』第三部の主要原稿の第 6 章「超過利潤の地代への転化」（彼が 61-63 年草稿でロートベルトゥスの著作を詳しく吟味してからおよそ 2 年半後に執筆）におけるロートベルトゥスへの言及個所（二回のみ。II/4.2,S.720,742. それぞれ II/15,S.754,776-7 に対応。いずれも「c. 絶対地代」の部分に属する）を参照。こうした両者の関係に鑑み、ロートベルトゥス自身の理論やマルクスのこれに対する批判にはここでは極力立ち入らないようにしたい。ロートベルトゥスの名前は比較的良く知られていても彼の著作やその内容は少なくとも日本ではほとんど知られていないのではないだろうか。だが専門的な研究文献がないわけではない。日本での研究の嚆矢は小泉 (1923) であろう。また戦後初期の研究としては平瀬 (1950) があり、比較的最近のものとしては折原 (1989) が目にとまった。それぞれに異なる立場からロートベルトゥスの経済学説の異なる諸側面を論じているが、いずれも最終的には――必ずしもマルクスと同じ意味においてではないが――むしろ否定的な評価に帰着している。この点で特に顕著なのは平瀬の研究書である。

ん夏や春には早起きすることはできる。しかし、これは短い冬の日によって相殺されるのであり、冬には一般に比較的わずかな量の労働しかできないのである。」(ebenda, S.677. 強調は原文）このように資本が制御することのできない労働日の長さの制限とその不規則さに加えて、生産物が最終的に完成して販売すべき商品の形をとるまでの生産期間とその内部で占める労働期間の相違――これはもちろん製造業でも存在しうるが、存在するとしても一般的には農業ほど大きくはないであろう――、つまり農耕労働を停止して生産物（農産物）の生育を待たなければならない農閑期が必ず一定のしかも相当大きな割合を占め、この間もちろん価値増殖も停止すると考えなければならない。資本主義的に経営される農業では賃労働者の雇用やその管理の様式も工業部門とはかなり異なる点があるであろう。こうしたことが、農業における剰余価値率を工業におけるよりも低く抑え、工業であれば部門が異なっても想定しうる（必要労働時間と剰余労働時間の割合としての）剰余価値率の均等化を農工間では想定することを困難にする。しかしそれと同時に、農業における「絶対的剰余価値」(ebenda, 強調は原文）がこうして工業より低くなりうるとしても、反対に農業ではこの傾向は「部分的には賃金のその平均水準以下への低下によって再び相殺される。」(ebenda, S.678) これは農業に資本が投下される農村部が工業の行われる都市部に比べて資本が遅れて浸透してきた地域であり、そこでの賃金が都市部よりも低くなる傾向があることによる（いわば強制された「相対的剰余価値」の生産)。これらの相反する傾向のいずれを生み出すのも農工両部門の異なる性格であるが、二つの傾向を合わせると剰余価値率は農業ではより低くなると必ずしも考えることはできないであろう。

だが利潤率に関しては、マルクスは農業部門のそれを相対的に高めうる次のような事情を指摘する。「これに反し、[・・・] 最も進歩した大農業においてさえも――充用不変資本に比べての充用者数の割合は、工業に比べて、少なくとも支配的な工業部門に比べて、やはりはるかに大きい。だから、この側面からすれば、たとえ先にあげた諸理由から剰余価値率が工業で同じ数の人間を充用した場合よりも相対的に小さいとしても [・・・]、利潤率は工業におけるよりも大きいということがありうる。しかし、利潤率を（工業に比べて一時的にではなく平均的に）高めるような何らかの理由が農業に存在するとすれば（われわれは、上述のことを指摘するにとどめるが)、単に地主が存在するというだけのことにともなって、この超過利潤は――一般的利潤率の均等化のうちに入いらないで――固

定化して地主の手にはいる、ということが起こるであろう。」（ebenda, S.678. 強調は原文）ここでのマルクスの議論はきわめて一般的でやや曖昧ではあるが、彼は農工両部門の相違の諸局面についての考察を重ねて行くうちに、「固定化して地主の手にはいる」「超過利潤」の問題に接近していく。特定の部門（農業）で発生する超過利潤がどうして「固定化して地主の手にはいる」のかとマルクスが問うのは、一般的には超過利潤はその発生源にはとどまり得ず社会的に再配分されて一般的利潤となって解消して行くからである。これはエンゲルス版『資本論』第三部の第一・第二篇（第三部主要原稿の第1·2章）において論じられている一連の理論的過程を通じて示されることであり、この過程を通じて導出されるのが、一般的には価値と乖離する生産価格の概念である。

マルクスは、61-63年草稿の「5 剰余価値に関する諸学説」の中の「g ロートベルトゥス氏」においてすでにこの「生産価格」(II/3.3,S.688) の概念を前提しており、それは上の引用文においても同様であると思われる。しかし、61-63年草稿の中でこの「g」が書かれているノートXに先立つ部分で論じられているのは、後の『資本論』第一部の中の「相対的剰余価値」までと「剰余価値に関する諸学説」だけであって、第三部に関連する諸主題はノートXVIに書かれている「第三章　資本と利潤」と題された第三部の最初の草稿で初めて扱われている。61-63年草稿の全体は新メガ第Ⅱ部門第3巻の6つの分冊という形で1976年から1982年のあいだに刊行され、初めて草稿から活字媒体に移されて広く利用可能となった（日本語訳は、『資本論草稿集』の第4-9冊として1978年から1994年にかけて大月書店より刊行）。メガの編集方針のひとつは収録されるテクストをその執筆・刊行の順に厳密にしたがって配列するということであるが、「第三章　資本と利潤」を含むノートXVIは、「5 剰余価値に関する諸学説」がノートXVでトマス・ホジスキンの検討をもって一旦中断された後に書かれたと判断されて、第5分冊 (II/3.5) の一部として1980年に刊行された。この刊行の直後に、大村　泉をはじめとする当時『資本論』の草稿研究に従事していた日本人研究者から、当時の東ベルリンとモスクワの両マルクス＝レーニン主義研究所のメガ編集担当者たちの判断とそれに基づく新メガ第Ⅱ部門第3巻の編集方針に対して異論が提起され、国内・国際両レベルでの激しい論争が起き特に日本国内では相当数の研究者をまきこんでしばらく続いたが、80年代中葉には大村らの主張がほぼ認められた。そして、「第三章　資本と利潤」は「5 剰余価値に関する諸学説」の主

要部分に先立って 1861 年 12 月から 62 年 1 月にかけて執筆されたこと、この草稿部分が含まれるノートの番号 (XVI) とその内部のページ番号は事後的に振られたことが、ベルリン・モスクワのメガ編集関係者も含めて論争当事者間でのその後の共通理解となるとともに、その後現在まで異論は提起されていない。ここではこの論争の細部に立ち入ることはせず、結果的に大方の合意が得られているこの見解にそのまましたがっておく[19]。

草稿「第三章　資本と利潤」の最後の項目は「七　資本主義的生産の進行に伴う利潤率の低下に関する一般的法則」と題されており、この草稿がエンゲルス版『資本論』第三部の第三篇（第三部主要原稿の第 3 章）までの理論的内容をカバーしていたことが分かる[20]。そして、その前の項目「六　生産費」において、個別利潤の平均利潤への転化と価値の生産価格への転化にかかわる一連の問題群について、マルクスはおそらく初めて立ち入った考察を加え、有機的構成のことなる諸資本によって生産される商品の平均価格が価値ではなく一般的にはこれと乖離する生産価格を中心として変動する、という理解を得ていたと思われる（ただし 61-63 年草稿の時期を通じて生産価格は費用価格――場合によっては「平均価格」――とも呼ばれている。）。初めてこのような問題領域に立ち入ったのであるから、「価値と生産価格を混同している」リカード理論への批判的言及がそこにあって当然と思われるが、この草稿が学説史ではなく将来の「第三章」（『資本論』第三部）となるべき最初の草案として書かれたためか、ここではリカードに対する批判的検討はなされていない。反対に、「g ロートベルトゥス氏」でマルクスが以前とは異なった新たな視角から地代理論に接近すると、これに関連してリカードの価値論・価格論が彼の地代理論における重大な欠落の根源として厳しく執拗に批判されることになる。「g ロートベルトゥス氏」から「h リカード」へのマルクスの議論の流れがこのような形を取ったのは、「第三章

---

⑲　この論争の経過と新たに合意が得られた見解の根拠との詳細については、大村 (1998) の「第 3 章「資本と利潤」の成立」と「第 4 章　1861-63 年草稿における第 3 部構想の成立」を参照。

⑳　逆に言えば、後に書かれることになる第三部の原稿のそれ以降についてマルクスはこの時はまだはっきりした見通しがなかったか、あるいは、第三部は「利潤率の低下」をもって終えると考えていたかであろう。この点からするとノート XVIII の中に出てくる（1862 年 12 月執筆と推定される）「第三篇 (Abschnitt)　資本と利潤」のプラン (II/3.5,S.1861) はその一年前に書かれた「第三章　資本と利潤」に比べて『資本論』第三部の構成にはるかに近くなっている。「5 剰余価値に関する諸学説」の一部で思いもかけず地代論について深く論考したことがこのような相違をもたらした要因のひとつであろう。

資本と利潤」が先行して書かれていたからに他ならない。

c. 価値と生産価格、農業

さて、マルクスは以上に見たような理論的コンテクストにおいて、彼自身も以前には考えてもいなかった新たな地代の概念に接近していく。「諸商品の平均価格はその生産に必要な労働時間によって規定される」（II/3.3, S.689. 強調は原文）、「平均価格は価値に等しい」（ebenda, S.690. 強調は原文）というリカードの見解に対して、マルクスは自分の見地を次のように対置する：「ところが、私が証明するのは、商品の価値が労働時間によって規定されるからこそ、諸商品の平均価格は（ある特定の生産部面のいわゆる個別的利潤率、すなわちこの生産部面自体において生みだされた剰余価値によって規定される利潤、このような個別的利潤率が総資本の平均利潤に等しいという唯一の場合を除けば）、けっしてそれの価値に等しくはありえない、ということである。」（ebenda, 強調は原文）したがって、「利潤は、商品に内在する剰余価値すなわち商品に含まれている不払労働の量よりも小さいということはありうるので、利潤・プラス・地代は、商品の内在的剰余価値よりも大きいことを必要としないのである。もちろん、この現象、すなわち、なぜこのようなことが他の生産部門とは区別されるある特殊な生産部門において生ずるかということは、なお説明を要するであろう。」（ebenda, 強調は原文）リカードにおいては商品の価値はマルクスの言う生産価格（費用価格プラス平均利潤）である[21]ので、商品の価格が平均利潤に加えて地代を含むとすればそれはその商品が価値以上の価格で販売されるからだと考えざるをえず、こうしてリカードはこのようにしてしか生じえない地代を彼の価値論の立場から否認するのである。だが、価値と生産価格とが区別されるべきことをすでに明らかにしているマルクスにとっては、このような地代は価値論を侵害することなく説明可能でありその存在は認めうるものである。

---

(21) 「マルサス氏は、ひとつのものの費用と価値とは同一であるべきだといのが、私の学説の一部である、と考えているようである。――氏のいう費用が、利潤をふくむ「生産費」の意味であるならば、その通りである。」(Ricardo, I/47) これはリカードが、1820年に刊行されたマルサスの『経済学原理』をめぐるマルサスとの論争を受けて、彼の『原理』第三版（1821年刊）の第一章「価値について」に新たに付加した第六節「不変の価値尺度について」の末尾に置いた注の中で述べていることである。この文言は彼の価値論の性格を結論的に非常に簡潔明瞭に表していると思われる。

上に引用した文章が属するのと同じ長大なパラグラフの終わりに近い部分で、マルクスはこの地代についてさらに次のように言う：「地代を生む商品は［生産価格を基準として売られず］、［価値と生産価格の大小関係について考えうる通常の商品の］これら三つの場合のすべてから区別される。どんな事情のもとでも、この商品が売られる価格は、平均利潤――資本の一般的利潤率によって規定される平均利潤――よりも多くを生みだす価格なのである。［・・・］この［地代が生じる］場合は、［通常の］諸商品の第二の場合、すなわちその内在的剰余価値が、その平均価格で実現される剰余価値よりも大きい場合に類似している。これらの商品の場合と同様に、こうした剰余価値――一般的利潤率にまで引き下げられて均等にされた剰余価値――の利潤形態が、この場合には投下資本の利潤を形成するのである。しかしながら、商品に内在する剰余価値のうちこの利潤を越える超過分は、第二の場合の［通常の］商品とは違って、この例外的商品においてもまた実現されるけれども、しかし資本の所有者ではなく別の所有者の手に、すなわち土地や自然力や鉱山などの所有者の手に、はいるのである。」（*ebenda,* S.690-1. 強調は原文）このような説明が可能なのはすでに生産価格論がマルクスの思考のなかに定着しているからである。こうしてリカードの地代論には存在しない新たな形態の地代概念の可能性が示されたが、しかし問題はこれで片づいたわけではない。「他の生産部門とは区別されるある特殊な生産部門」で「地代を生む商品」・「例外的な商品」が生産され、その販売価格が生産価格化されないという「現象」は、「なお説明を要する」のである。

またマルクスは、上の引用文にすぐ続くパラグラフにおいて、上の引用文で彼が述べたことに対応して、このような地代はある種の「例外的な商品」が生産価格を上まわる価格で販売されることから生じるとしても、この価格が規則性のない独占価格であることを強く否認しあくまでも「価値法則」の規制に服しこれを破綻させない価格であると主張する。「それとも、この商品の価格は、平均利潤率よりも多くを生ずるほどにつり上げられるのであろうか？これは、たとえば本来の独占価格の場合がそうである。この仮定は、資本と労働が自由に充用されうるし、またその生産が充用資本量に関するかぎり一般的諸法則に従うようなあらゆる生産部面においては――ひとつの論理的誤りであるだけではなく、科学と、この科学がその理論的表現にすぎない資本主義的生産との基礎に直接に矛盾するであろう。［・・・］つまりこの仮定は、農産物が商品価値と資本主義的生産との一般的諸

法則から免れていることを前もって想定することになるであろう。」（ebenda, S.691. 強調は原文）この点をマルクスは彼の新しい地代論の重要論点のひとつとして繰り返し強調している (ebenda, S.749, 815, 960) が、それはリカードが否認した地代の形態をあくまでも価値法則を侵害することなく説明することを目指そうとしたからであろう。価値と理論的に関連付けることのできない独占価格での販売によって新しい形態の地代が発生することを認めれば、このような彼の意図は破綻することになるであろう。だが、一定の状況のもとで一定の種類の農産物が「買手の欲望と支払い能力」のみによって制約される高い価格で販売され、これが超過利潤なり地代なりの発生源になりうることは、マルクスももちろん認める。しかし「例外的」とはいえある一定の規則性をもって発生する地代が一定の規制のもとに置かれるのは、当該商品の生産と流通が競争的条件に服するからである。マルクスは、独占価格から地代が生じ得ない（この場合にも価値法則の妥当なことを主張する）根拠を、次のように説明する：「このような例外［外部との穀物取引のない小島］を別とすれば、土地所有は、ただ諸資本間の競争が諸商品の価値の規定を変更するかぎりでのみ、諸資本の行動に――それらの競争によって――影響を及ぼし、それを麻痺させることができるのである。価値の費用価格［生産価格］への転化は、ただ資本主義的生産の発展の帰結であり結果でしかないのである。本源的なものは、（平均的に）諸商品がその価値どおりに売られる、ということである。」（ebenda,S.960. 強調は原文）筆者の調べた限りではマルクスの説明はこれに尽きると言ってよく、生産手段の独占に他ならない土地所有の力（競争の制限）によって価格が引き上げられて地代が発生するのにこの引き上げがどうして一定の点（価値の大きさ）を超えられないのか、このことは十分に説明されていないように思われる[22]。

さて、マルクスは生産価格の理論に基づいて、資本が生産する商品の中にはその価値の生産価格への転化が事実上価値以下への価格の引き下げとなるような部類のものが存在することを示し、地代が発生する潜在的可能性をここに見いだした。どのような特別な「例

---

(22) この点をめぐってはKautsky (1899)（第5章「近代的農業の資本主義的性格」）以来古くから疑問が提起され論争問題となっている。日本では戦後早くから大内 (1958)・日高 (1962)・日高 (1964)・大内 (1982) によって問題提起が行われこれらに続いて多くの論争文献が生み出された（久留島他編 (1984) の「第Ⅲ部　研究と論争　3 絶対地代をめぐる論争」（飯島充男）を参照）。

外的な」条件の下で、この価格の引き下げが阻止されて商品が生産価格を超える価格で売られ地代が現実に発生するのか、これが「なお説明を要する」問題であった。マルクスは次のように自問する。「問題になるのは、この商品は、［・・・］それ自身の剰余価値のうちで平均利潤を越える超過分を形成する部分をも実現するということがどのようにして起こるのか？ということを説明することである。こんなふうに、このことが原因となって、この生産部面に資本を投下する借地農業者は、その商品を、彼にとって通常利潤をもたらすと同時にその商品の剰余価値のうちこの利潤を越えて実現された超過分を第三者である地主に支払うことをも彼に可能にさせるような価格で販売する、ということが可能になるのである。」（ebenda,S.692. 強調は原文）ここには、価値から生産価格への転化の阻止による超過利潤の発生とこれの地代への転化という、二つの問題があるように見えるが、実はこれらは相互前提をなし不可分一体の単一の問題に帰着する。この自問に彼は次のように自答する：「この特殊な生産部面の諸商品、この特殊な資本投下の諸商品に含まれている剰余価値のうちの利潤（平均利潤、一般的利潤率によって規定された利潤率）を越える超過分を、横取りし、奪い取り、閉じこめて、一般的利潤率が形成される一般的過程に入らないように阻止することを可能にしているのは、まったく土地や鉱山や利水などに対する特定の人々の私的所有である。」（ebenda. 強調は原文）さらに次のように続ける：「この所有は、その他の資本主義的生産部面において行われるこのような過程を阻止して、この特殊な生産部面で生みだされた剰余価値がこんどは資本家と土地所有者のあいだで分けられるように、それをそれ自身の生産部面に引き止めておく手段である。これによって、土地所有は、資本がそうであるのと同じように、不払労働、無償労働にたいする指図証になる。そして、資本においては労働者の対象化された労働が労働者にたいする力として現れるように、土地所有においては、それがその所有者のために資本家から不払労働の一部分を取り上げることを可能にし、こうして土地所有が価値の源泉であるという事態が現れてくる。」(ebenda,S.699)

こうして「土地所有」こそが、ある特定の生産部門において社会的平均よりも高い個別利潤率の平均利潤率への転化を妨げて超過利潤を発生させるとともにそれを地代に転化させる原因であることが示された。だがさらに問題が残る。すなわち、このような土地所有が介在する産業部門（その主要なものが農業であることはいうまでもない）で、超過利潤

の源泉となる社会的平均より高い利潤率（投下資本に比べてより大きい剰余価値量）がなぜ得られるのか、が示されなければならない。

ｄ. 農業における資本の構成、ロートベルトゥスの「新しい地代理論」

実は、これまでに見てきたマルクスのテクストはすべて、「g ロートベルトゥス氏」の項でマルクスが実際にロートベルトゥスの著作の内容の検討に取りかかる（II/3.3,S.712. ノートXの465ページ）前に、（もちろんこの著作に触発されながら）この著作の主題（リカード地代論の批判と代替的な新たな地代論の提起）について検討するために、まずもってみずからの理論的枠組みを整える作業を行っていると思われる部分に属するものであった(II/3.3,S.676-99)。マルクスは草稿の上記の個所ではじめて、ロートベルトゥスのテクスト（それも彼の著作の最初ではなく「本論」の「(一）リカード理論の国家経済的批評」の中の11番目の項目（番号は付いていない）「土地所有と資本所有が分離している国民経済的状態の解明」の第一パラグラフ（Rodbertus (1851), S.81-2. 注13に示した山口訳、97ページ）から短い章句を断片的に引用し、ここからテクスト分析を開始している。

マルクス自身が新たな地代の理論の構築を模索する過程で最後に残された問題は上記のようなものであったが、この問題を考える上でロートベルトゥスの著作が彼にあるヒントを与えたと思われる。マルクスもこの草稿執筆とほぼ同じ時期にあたる1862年6月16日付けのラッサール宛の手紙の中で、「ロートベルトゥス氏の積極的な解決はたしかに幼稚ではあろうが、正しい傾向を含んでいる」（III/12, S.133. 前出）と彼の著作に一定のメリットが含まれることを率直に認めている。しかし筆者の見るところでは、このような評価に該当するのはいまここで問題にしようとしている一点のみであると思われる。

マルクスはロートベルトゥスがリカードの地代論に代替するものとして提出した彼自身の地代論を微細に検討した結果、その誤りを六点にわたる「たわごと(Blödsinn)」に要約し(II/3.3,S.747)そのことごとくに手厳しい批判を加えた上で、「すべてのこうしたたわごとをはぎとってしまえば、核心として残るところは単に次のような主張だけである」(ebenda)として、特定部門にだけ固有に発生する地代の源泉について論じている。これは事実上、この文言に続くパラグラフでマルクスが要約的に述べている内容がロートベル

トゥスに帰しうるものであること、そして、後者がリカードには存在しなかった新しい地代の概念を半ば提起したことを、彼が認めているということではないか。「半ば」というのは、19 世紀中葉までのドイツ（東北部）の農業の後進性に立脚した不適切な形態においてではあるが、農業で工業よりも相対的により多くの剰余が生産されることをロートベルトゥスが明らかにしたからであり、しかし同時に、この相対的により多くの剰余がどうして農業部面にとどまって地代を形成することになるのかを彼が示していない[23]からである。さて、マルクスが上に言う「核心」とは次のようなものである：

「原生産物 (Rohproducte) がその価値どおりに売られるとすれば、その価値は、他の商品の平均価格よりも高い。またはそれ自身の平均価格よりも高い、すなわち、生産費・プラス・平均利潤よりも大きいのであって、したがってそれは地代を形成する超過利潤を残すのである。これは、さらに言えば、可変資本が（剰余価値の率を同じとすれば）不変資本に比べて、原生産 (Rohproduction) では、工業に属する諸生産部面の平均よりも大きいことを意味する（これは、可変資本が工業部門の一部で農業におけるよりも大きいことを妨げるものではない［にもかかわらずそこでは地代は発生しない］）。あるいはなお、より一般的に言えば、農業は、工業の生産部面のうち、不変資本にたいする可変資本の割合が工業部面の平均よりも高い部類に属する。だから、農業の剰余価値をその生産費にたいして計算すれば、工業部面の平均よりも高くならざるをえない。これはまた、生産の各部面における特殊的利潤率は、剰余価値率が等しくまた剰余価値そのものが与えられていれば、

---

(23) 彼にとって農業は地主が自ら自己資本と借入れ資本をもって（農業労働者を雇用しつつ）いとなむものであり、そこで発生する剰余は借入れ資本に対する利子の支払いを除けばすべて地主の手に帰するので、すべての収益（剰余）が最初から地代として一緒くたに扱われ、マルクスが考えていた地代への転化というような問題は最初から存在しない。リカードやマルクスは（資本、賃労働、土地所有という）三階級モデルに基づく完全に資本主義化された農業を想定し、工業と同一の理論的範疇をもって農業を論じている。しかし 19 世紀半ばまでの（あるいはそれ以降においてさえ）ヨーロッパ大陸の農業は、彼らのこうした理論的想定とは大きく乖離した状態にあった。ロートベルトゥスのリカード批判も実は両者が想定している農業のありかたの落差に基づくところが大きく、多くの議論がすれ違いに終わっている。マルクスはロートベルトゥスのリカード批判と地代論へのアプローチを揶揄的に「ポンメルンの地主の観念」(II/3.3,S.808) と呼んでいる（関連して次の個所も参照：ebenda,S.801-13, 883）。ポンメルンとは現在のポーランド北西部からドイツ北東部のバルト海沿岸地域の名称であり、イギリスなどの先進地域と比べて一般に遅れていた当時のドイツの中でも経済的な後進地域であった。ロートベルトゥスはここで土地を所有し自らも農業をいとなんでいた。だが本稿の主題から離れるこのような事情については以上にとどめておく。

特殊的部面における可変資本の不変資本に対する割合によって定まる、ということを意味する。」（ebenda,S.747-8. 強調は原文）これは、「ポンメルンの地主」ロートベルトゥスが、農業では種子などの原材料が自家調達されその価値がゼロであることを理由に農業における資本構成の低位を導き、そこからさらに農業部門に固有の超過利潤の発生を説いたのを、マルクスが自己の理論的枠組みをもって言い換えたものである。「したがって、このことは、私によって展開された一般的な法則を、ただ、ある特殊な産業部門において、言いあらわしただけであろう。」（ebenda,S.748. 強調は原文）

では、ロートベルトゥスのような説明が資本主義的農業に対しては妥当せず誤っているとすれば、農業の利潤が「平均利潤よりも高く、したがって、この平均利潤のほかになお超過利潤をもたらす」（*ebenda*. 強調は原文）ことをどのように説明すればよいのか。マルクスは、このことは「平均的な農業については確実であるように見える」と言う。「というのは、農業では相対的に手仕事がなお重きをなしており、また農業よりも製造工業を急速に発展させることがブルジョア的生産様式に特有なものだからである。それにしても、これは歴史的な相違であって、消滅しうるものである。」（ebenda. 強調は原文）農業の個別的利潤率が工業に比べて高いのは農業の生産力が低く農業に投下される資本の有機的構成が工業よりも低いからである。その理由は、イギリスでは19世紀の始めから機械制大工業が発達普及しているのに対して、農業では技術的革新（自然科学の応用）が工業におけると同じように進まず、マルクスの時代においても「相対的に手仕事がなお重きをなして」いるからである。マルクスは、農工間でのこのような相違が生じた理由を、農業と工業の性質の相違に対応した異なる科学分野に基礎をおく生産技術の適用がタイムラグをともなうことに求める。上の引用個所の少しあとで彼は次のように言っている：「大工業の本来の科学的な基礎、一八世紀にある程度まで完成されていた機械学が必要である。一九世紀、特に最近の数十年間においてようやく、工業にとってよりも高い程度で直接に農業にとっての特殊な基礎をなす諸科学――化学、地質学および生物学――が発達している。」（*ebenda*.S.762. 強調は原文）ほぼ同じ頃の62年8月02日付けのエンゲルス宛の手紙でも彼は同様に次のように言う：なぜこれまで農業の生産性が遅れていたのか、「これはわかりきったことだ、というのは、ほかのことはすべて別としても、工業の前提は機械学という比較的古い科学だが、農業の前提は化学や地質学や生理学というまったく新しい科学だ

からだ[24]。」(III/12, S.181)

地代に転化する超過利潤の発生の根拠となるべき農業の生産力（したがってそこに投下される資本の有機的構成）が工業に比して相対的にいかなる関係に立つのかは、このように歴史的状況に依存して変化しうるものと捉えられていた。マルクスが上の引用文の最初で農業の生産力の遅れが「確実であるように見える」と言ったのは、彼の時代までの農業の一般的な傾向を捉えてのことであって、この状況に何らかの必然的な理由があると考えたからでは決してなかった。むしろ、蒸気機関に象徴される機械学に代わって十九世紀に入ってから発達した「化学、地質学および生物（理）学」の農業への応用が進めば、農業が工業よりも急速に生産力を伸ばすことがありうると彼は見ていた。もしこのようなことが起きれば農業部門の有機的構成が相対的に高くなりそこでの超過利潤は消滅しそれとともにこの超過利潤を存在根拠とする地代も消滅するであろう。まさにこれが上の最初の引用文におけるマルクスの結論であった。土地所有と有機的構成の低位を根拠にして、リカードが考えおよばなかった新たな形態の地代が現実に発生しうることを論じ終えたとた

---

(24) フォスターは Foster (2000) の中で次のように言っている。「歴史家は今でも十七世紀から十九世紀にかけてイギリスで起こり、産業資本主義の基礎を築いた農業革命を唯一のものとすることが多いが、農業歴史学者は第二の、ときには第三の農業革命を口にすることがある。この考え方によれば、第一の革命は何世紀にもわたって起こった漸次的なプロセスで、囲い込みおよび市場の重要性の増大と結びついていた。そこでの技術的変化には肥料の改良、輪作、排水、家畜の管理が含まれる。これに対し、第二の農業革命はより短期間（一八三〇年から一八八〇年）に起こり、肥料産業の成長と、とりわけユストゥス・フォン・リービッヒの業績と関連した土壌化学の発展によって特徴付けられる。」（渡辺訳、238 ページ、foster2000,p.148-9）ここでフォスターの言う「第二の農業革命」において生じた変化はマルクスが述べていることに部分的に対応しているし時期的にもほぼ一致していると思われる。リービッヒは Liebig (1862)（第七版）に付した長大な「序論 (Einleitung)」の最初の二つの項をあてて 1840 年を境として前後二つの時期に分けて農業の歴史を論じている。1840 年が転換点とされているのはもちろん、賛否両論の反響を呼び起こし大きな影響力をもった彼自身のこの著作の初版がこの年に出版されたからであろう。また、リービッヒの著作の出現を契機としてドイツの農学の世界はそれまで支配的であったテーア (Thaer, A.D., 1752-1828) に代表される有機栄養説＝「腐植説 (Humustheorie)」からリービッヒの「無機栄養説（Mineraltheorie. 鉱物（ミネラル）説とも呼ばれる）」に大きく転換したと言われる（相川 2007, 30-1 ページ）。この年は大まかにはフォスターの言う「第二の農業革命」の始まりの時期と一致する。なお、マルクスが、彼がすでに 1851 年に読んでいた 1842 年刊の第四版（前述のようにその抜粋は IV/9 に収録）とは面目を一新したこの第七版に接するのは、1865 年になってからのことであった（次節参照）。マルクスはリービッヒの著作を高く評価し 1850 年代と 60 年代に合計 3 回にわたって詳しい抜粋をとっている。これに対してどういう理由からか、彼がテーアおよびその著作に言及したことは生涯を通じて一度もなかった。

んに、その消滅の可能性が持ち出されているのである。このような地代は資本主義経済に必ずともなうものではなく、状況しだいでは資本主義の下でもなくなりうるのであるから、資本主義分析にとって不可欠の要素であるかどうかさえ疑いうるかもしれない（飯島 (2016) は絶対地代論そのものの理論的意義を否定している）。さらに、マルクスはこの地代の消滅の可能性について上に引用した個所に限らず彼が1862年に書いた草稿・書簡のなかでその後も繰り返し論じている（Cf. II/3.3, S.756-9, 887, 1019, III/12, S.181. さらに、65年12月に執筆された第三部「主要原稿」の第6章「超過利潤の地代への転化」の「c. 絶対地代」の項においても同じ問題が二度にわたって論じられている）。にもかかわらず、後に見るように、マルクスはこの地代形態を彼の「経済学批判」体系から決して除外しようとはせず、むしろその理論的意義を重視しつづけていたように思われる。この地代が彼の経済学研究にとっていかなる意味で重要であったのかは、「g ロートベルトゥス氏」の項以後の理論的コンテクストにおいて論じることにしたい。

参考文献目録

1．第一次文献

[Anon.], On the Principles of Political Economy and Taxation. By David Ricardo, Esq. Second Edition. London, 1819, *The Farmer's Magazine: A Periodical Work, exclusively devoted to Agriculture and Rural Affairs*: 1819. Vol. XX, Edinburgh Monday, 3. May, 1819. (No. LXXVIII.), Branch II. Review of Agricultural Publications. Art. I.

[Anon.], Cursory Remarks on the Theories of Messrs Ricardo and Torrens, *The Farmer's Magazine: A Periodical Work, exclusively devoted to Agriculture and Rural Affairs*: 1820. Vol. XX, Edinburgh Monday, 8. May, 1820. (No. LXXXII.), Branch I. Original Communications.

Craig, J.(Craig1821), *Remarks on some Fundamental Questions in Political Economy*, Edinburgh, Constable, 1821 [pp.128-37]

Engels, F. (I/3), Werke, Artikel, Entwürfe bis August 1844, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 1ste Abteilung, Werke, Artikel, Entwürfe Band 3, Dietz Verlag Berlin 1985

Liebig, J. v.(Liebig1862), *Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agricultur und Physiologie*, 7te Auflage, Braunschweig, Friedrich Vieweg und Sohn, 1862（リービヒ『科学の農業および生理学への応用』吉田武彦訳、北海道大学出版会、2007年［Zöller 編第九版、1876年より］）

Malthus, T.R.(Malthus1815) *An Inquiry into the nature and progress of rent and the principles by which it is regulated*, London, Murray (in: The works of Thomas Robert Malthus, volume seven, Essays on political economy, edited by E.A. Wrigley and David Souden, Routledge, 1986, pp.115-45)（マルサス『穀物條例論および地代論』楠井隆三・東　嘉生訳、岩波文庫、1952年）

Karl Marx/ Friedrich Engels Papers *91*(Marx*91*), Inv. nr. A 80c [A 54], ARCH00860, International Institute of Social History, Amsterdam

Karl Marx/ Friedrich Engels Papers *217*(Marx*217*), Inv. nr. B 106 [B 98], ARCH00860, International Institute of Social History, Amsterdam

Marx, K.(Marx1847), *Misère de la philosophie, réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon*, Bruxuelles, 1847 (in : *Karl Marx Œuvres Economie I*, préface par François Perroux, édition établie et annotée par Maximilien Rubel, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1972. *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 4, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1959)

Do. (Marx1953), *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie: Rohentwurf 1857-1858, Anhang 1850-1859*, Dietz Verlag, Berlin

Marx, K. (II/1, 1・2), Ökonomische Manuskripte 1857/58, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung, "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 1, Teil 1, 2, Dietz Verlag Berlin 1976, 1981

Do.(II/3.3), Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863). Teil 3, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 3.3, Dietz Verlag Berlin 1978

Do.(II/4.2), Ökonomische Manuskripte 1863-1867, Teil 2, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 4.2, Dietz Verlag Berlin 1992

Do.(II/4.3), Ökonomische Manuskripte 1863-1868, Teil 3, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 4.3, Akademie Verlag 2012

Do.(II/5), Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie. Erster Band, Hamburg 1867, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 5, Dietz Verlag Berlin 1983

Do.(II/6), Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie. Erster Band, Hamburg 1872, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 6, Dietz Verlag Berlin 1987

Do.(II/7), Le Capital, Paris 1872-1875, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 7, Dietz Verlag Berlin 1989

Do.(II/9), Capital. A Critical Analysis of Capitalist Production, London 1887, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 9, Dietz Verlag Berlin 1990

Do.(II/14), Manuskripte und redaktionelle Texte des "Kapitals" 1871 bis 1895, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 14, Akademie Verlag Berlin 2003

Do.(II/15), Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie. Dritter Band, Hamburg 1894, in *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: "Das Kapital" und Vorarbeiten Band 15, Akademie Verlag Berlin 2004

Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA) (III/4, III/7, III/8,), 3te Abteilung, Briefwechsel, Band 4, Januar bis Dezember 1851, Band 7, September 1853 bis März 1856, Band 8, April 1856 bis Dezember 1857, Dietz Verlag Berlin, 1984, 1989, 1990

Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA) (III/9, III/11, III/12, III/13), 3te Abteilung, Briefwechsel, Band 9, Januar 1858 bis August 1859, Band 11, 1860 bis Dezember 1861, Band 12, Januar 1862 bis September 1864, Band 13, Oktober 1864 bis Dezember 1865, Akademie Verlag, Berlin, 2003, 2005, 2013, 2002

Karl Marx-Friedrich Engels Werke (MEW, Bd.31,32), Bände 31-2 Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1965 (Briefwechsel von 1864 bis 1867, von 1868 bis 1870)

Marx, K. (IV/4), Exzerpte und Notizen, Marginalien, Juli bis August 1845, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 4te Abteilung, Exzerpte・Notizen・Marginalien, Band 4, Juli bis August 1845, Dietz Verlag Berlin, 1988

Do. (IV/9), Exzerpte und Notizen, Marginalien, Juli bis September 1851, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 4te Abteilung, Exzerpte・Notizen・Marginalien, Band 9, Dietz Verlag Berlin, 1991

Marx, K., Engels, F. (IV/32), Die Bibliotheken von Karl Marx und Friedrich Engels : annotiertes Verzeichnis des ermittelten Bestandes / Karl Marx, Friedrich Engels, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 4te Abteilung, Exzerpte・Notizen・Marginalien, Band 32, Akademie Verlag Berlin, 1999

McCulloch, J.R. (McCulloch1845)*The literature of political economy: a classified catalogue of select publications in the different department of that science, with historical, critical, and biographical notices*, London, Longman

Ricardo D. (Ricardo, IV), An essay on the influence of a low price of corn on the profits of stock etc., London, 1815, in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Edited by Piero Sraffa with the Collaboration of M. H. Dobb, Cambridge University Press, Vol. IV, 1951

Do. (Ricardo, I), On the principles of political economy, and taxation, London, 1817, in *The Works*, Vol. I, 1951

Rodbertus, J.K. (Rodbertus1851), *Sociale Briefe an von Kirchmann von Rodbertus. Dritter Brief: Widerlegung der Ricardo'schen Lehre von der Grundrente und Begründung einer neuen Rententheorie*, Berlin, Allgemeine Deutsche Verlags-Anstalt

Schumpeter, J.A.(Schumpeter1954) *History of economic analysis*, London, New York（J.A. シュンペーター『経済分析の歴史（上・中・下）』東畑精一・福岡正夫訳、岩波書店、2005-6年）

Thaer, A.D, (Thaer1809-12), *Grundsätze der rationellen Landwirtschaft*, Erste Auflage in vier Bände 1809-1812, neue Auflage, G.Reimer, Berlin, 1837（アルブレヒト・テーア『合理的農業の原理』相川哲夫訳、農文協、2007年）

West, E., (West1815), *Essay on the application of capital to land, with observations…*, London（E. ウエスト『穀物価格論』橋本比登志訳、未來社、1963年）

2. 日本語第二次文献

相川哲夫（相川2007）「訳者解題」（アルブレヒト・テーア『合理的農業の原理』同訳、農文協、上巻）

飯島充男（飯島2013）「差額地代第二形態の概念と意義」『商学論集』（福島大学）、81巻4号

同（飯島2016）「虚像としての絶対地代論」『商学論集』（福島大学）第84巻第4号

大内　力（大内1958）『地代と土地所有』東京大学出版会

同（大内1982）『経済原論　下』（大内　力経済学体系第三巻）東京大学出版会

大村　泉（大村1986）「絶対地代の発見と「資本一般」――『剰余価値学説史』「g　ロートベルトゥス氏」と草稿第三章「資本と利潤」との連繋――」研究年報『経済学』Vol.48 No.3. Nov.

同（大村1998）『新MEGAと《資本論》の成立』八朔社

折原　裕（折原1989）「ロートベルトゥス経済学と絶対地代論」『武蔵大学論集』第37巻第1号

加用信文（加用1965）「農業における土地の経済的意義」『農業綜合研究』第7巻第1号（同著『農業経済の理論的考察』御茶の水書房、1965年所収、増補版1970年、引用はこの増補版による）

同（加用1970）「アンダーソンの地代論に関する書誌的考察」『農業総合研究』24巻3号（同著『イギリス古農書考』御茶ノ水書房、1978年、増訂版1989年、引用は後者より）

同（加用1972）『日本農法論』御茶の水書房

菊池壮蔵（菊池2003）「地代論におけるアンダソンとマルサス 地代論の系譜に関する一考察」『マルサス理論の歴史的形成』永井義雄他編、昭和堂、2003年、所収
久留島陽三・保志　恂・山田喜志夫編（久留島他編1984）『資本論体系7　地代・収入』有斐閣
小泉信三（小泉1923）『価値論と社会主義』改造社（『小泉信三全集』第三巻、文藝春秋社、1968年、所収、引用は全集版より）、「第二篇　ロオドベルトスの価値論研究　第二章　ロオドベルトスの地代論とリカルドオ」
斉藤幸平（斉藤2014）「マルクスの近代農業批判の成立と抜粋ノート」『唯物論』（東京唯物論研究会）第88号
同（斉藤2016c）「「フラース抜粋」と「物質代謝論」の新地平」、岩佐　茂・佐々木隆治編『マルクスとエコロジー　資本主義批判としての物質代謝論』堀之内出版、2016年、所収
佐々木隆治（佐々木2016）「経済学批判体系における物質代謝論の意義」、岩佐・佐々木編著所収
佐藤金三郎（佐藤1968）『『資本論』と宇野経済学』新評論
椎名重明（椎名2014）『農学の思想　マルクスとリービヒ』東京大学出版会、2014年（増補新装版、初版1976年）
杉原四郎・重田晃一「訳者解説」（杉原・重田1970）（同訳『マルクス　経済学ノート』未來社）
竹永　進（竹永2010）「1860年代中葉におけるマルクスの地代論研究――同時期の抜粋ノート、61-63年草稿、『資本論』第3部第6篇の対比による解明――」『経済論集』（大東文化大学）95号（大谷禎之介・平子友長編『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』桜井書店、2013年、収録。第6章）
鳥居伸好（鳥居1997）「第六篇　超過利潤の地代への転化」『経済』（新日本出版）1997年5月号
羽島有紀（羽島2017）「マルクスの地代論草稿とその射程」『季刊経済理論』54巻2号
林　健一（林1973）「絶対地代の名称的根拠」『商経論叢』（九州産業大学）14巻2号
羽鳥卓也（羽鳥1982）『古典派経済学の基本問題』未來社
日高　普（日高1962）『地代論研究』時潮社
同（日高(1964)）『経済原論』時潮社
平瀬巳之吉（平瀬1950）『古典經濟學の解體と發展――ロォドベルトゥス批判――』日本評論社（第二章　剰余価値の理論　第三節　利潤論および地代論）
福冨正実（福冨1989）『経済学と自然哲学』世界書院
吉田文和（吉田1980）『環境と技術の経済学――人間と自然の物質代謝の理論――』青木書店
吉田武彦（吉田2007）「解題」（リービヒ『化学の農業および生理学への応用』同訳）

3. 外国語第二次文献

Burkett, P. (Burkett2014), *Marx and Nature, A Red and Green Perspective*, Haymarket Books, Chicago, Illinois, 2014 (originally 1999)
Foster, J. B. (Foster2000), Marx's ecology: materialism and Nature, Monthly Review Press（ジョン・ベラミー・フォスター『マルクスのエコロジー』渡辺景子訳、こぶし書房、2004年）
Gehrke C. (Gehrke2012), Marx's critique of Ricardo's theory of rent, A re-assessment, in: *Classical Political Economy and Modern Theory, Essays in honour of Heinz Kurz*, edited by Christian Gehrke, Neri Salvadori, Ian Steedman and Richard Sturn, Routledge
Howard, M.C., King, J.E. (Howard et al.1992), Marx, Jones, Rodbertus and the theory of absolute rent, *Journal of the History of Economic Thought*, No.14, 1992
Kautsky, K. (Kautsky1899), *Die Agrarfrage: eine Übersicht über die Tendenzen der modernen Landwirtschaft und die Agrarpolitik der Sozialdemokratie*, Stuttgart（カール・カウツキー『農業問題（上・下）』向坂逸郎訳、岩波文庫、1946年）
Marx-Engels-Lenin-Institut (ed.) (MEL Institut1934), *Karl Marx Chronik seines Lebens in Einzeldaten*, Marx-Engels-Verlag, Moskau 1934（M･E･L研究所編『マルクス年譜』岡崎次郎・渡辺　寛訳、青

木書店、1960年）

Pasinetti, L. P. (Pasinetti2014), Sur l'origine de la théorie de la rente en économie, in : *Economie, mathématique et histoire, Hommage à Christian Bidard*, sous la direction de Fabrice Tricou et Danielle Leeman, Presses Universitaires de Paris Ouest, 2014 (originally written in English in 1990, French translation by Oliver Rosell)

Prendergast, R. (Prendergast1987), James Anderson's Political Economy——His Influence on Smith and Malthus, *Scottish Journal of Political Economy*, Vol.34, No.4, Nov. 1987

Saito, K. (Saito2016a), *Natur gegen Kapital——Marx' Ökologie in seiner unvollendeten Kritik des Kapitalismus,* Campus Verlag, Frankfurt

Saito, K. (Saito2016b, Marx's ecological notebooks, *Monthly Review*, Feb. 2016

Schnickmann, A. (Schnickmann1987), Marx' Arbeit über die Grundrente im Jahre 1865, *Beiträge zur Marx-Engels Forschung*, H.23, 1987

Sperl, R. (Sperl1995), *Allgemeiner Prospekt der Bände IV/10 bis IV/32 (Neufassung)*

Ternowski, M. (Ternowski1985), Die Agrikulturchemie und die Entwicklung der Grundrententheorie durch Marx, *Marx-Engels-Jahrbuch* 8, 1985

Ternowski, M. (Ternowski1987), Die erste deutsche Auflage des ersten Bandes des "Kapitals" und das Marxsche Exzerptheft von 1865 bis 1866, *Beiträge zur Marx-Engels Forschung*, H.27, 1989